

# 學 報

Kobe College Bulletin

ISSN0389-164X

NO. 187

2019.12.19

神戸女学院

学報委員会

## 今、ふたたび、神戸女学院！

学長 齊藤 言子

暑い！熱い！！夏が過ぎ、秋が駆け足で通り過ぎてゆきました。あっという間にクリスマスを迎え、そして令和元年も終わろうとしています。世界では、政変、災害などにより多くのことが迷走し、時間がとてつもなく長く感じたり、また反対に追いつくことができないせわしない時間の流れの中で翻弄され、心乱れることもあります。そのような中でも、岡田山には穏やかな空気が流れ、心地よい時間の中に身を置くことのできるかけがえのない環境に改めて感謝する日々です。

さて、大学では毎年、教員による自己点検・評価活動をおこない、外部評価委員会（大学外部からの評価委員4人により構成）による評価が丁寧かつ厳正におこなわれています。文部科学省からの「大学教育分野別質保証の在り方について」に対して審議を重ねられた制度ではありますが、当初はこれにより、揺るがない建学の精神のもと、特徴のある独自の教育を進めるといふ大学カラーが薄れていくのではないかと危惧もありました。しかし評価のルール、基準、書式などについて、大学内で概ね周知徹底され、自己評価の査定基準も整ってきており、教職員の意識向上とともに自己評価は信頼性の高いものになってきています。評価においては、PDCA（plan-do-check-act）サイクルが円滑に作動しているかということが重要なポイントの一つであり、本学では内部質保証の一環として、各組織がPDCAサイクルに基づいた自己点検・評価活動をおこなっており、有用な成果につながってきています。しかしながら、「PDCAサイクルに馴染まない、中期目標を定めることができない学務・業務」などもあり、また自己点検・評価活動の作業そのものが教職員の時間的な負担となり疲弊を招いては、本末転倒になってしまいます。大学の教育現場においては、教育、研究、学務の質が保たれ運営されていることが



最も大切に重要であると考えます。本学自己評価委員会においてもその問題意識を有しており、評価内容の再検討を進めてまいりました。大学基準協会による大学認証評価（大学の理念、教育組織、教育内容などについて基準に対して適合か否かの認定がおこなわれます）の評価項目の内容の見直しにより内容自体が大幅に変更されることにも対応すべく、新たな自己評価・評価データマネジメントシステムを導入し自己点検作業にかかわる負担を軽減し、さらに、大学全体としての目標・計画と各組織の主体的な取り組みとの整合性、目標達成までのプロセスを重視してゆく方向で進めてまいりました。そして、中期目標と活動計画評価報告書を提出し、本年度9月に第8回外部評価委員会において確認、検証がおこなわれました。その結果、「神戸女学院大学

が目指す【大学像】である豊かな人間性と国際感覚を育む、日本を代表するキリスト教主義リベラルアーツ女子大学に対して、そのさまざまな取り組みを自己点検・評価する大学の努力は敬服に値するものです」との評価とともに大学、各組織に対しての問題提起、提言が示されました。「愛神愛隣」「キリスト教主義教育」に対しての更なる学生意識の醸成やボランティア活動の促進と単位化などに加え、女性が輝く社会の実現に向けての人材育成と、文学・ジェンダー・心身の健康・環境・音楽などに関わる学問・研究がどのように社会実践できるかが今日の課題との回答をいただきました。真摯に受け止め、今後の活動に反映させてまいります。

本学では毎年「これからの道標」を公開しております。目指す【学生像】は、「21世紀にふさわしい教養と高い知性、高い語学力、そして『愛神愛隣』の精神を身に付け、どのような立場に置かれても十分に能力を発揮し、状況に立ち向かうことができる学生」です。取り組みの概要としましては、1)「これからの道標」の深化、評価と検証 2) グローバル時代への対応 3) リベラルアーツ教育の充実と応用 4) 自主性を促す学修及び学習支援環境の整備 5) 学生の学内学修・生活環境の充実 6) キャリア・サポート体制の充実 7) 教職課程の充実 8) 専門課程の充実 9) 広報体制の強化 10) キャンパス・グランドデザインの構築 11) 学院創立150周年に向けた取り組み、そして本年度は新たに12) として「本学への帰属意識の向上：ゆるがない建学の精神のもと、学生、教職員、同窓生が、誇りと自信をもって、本学にかかわってゆく意識を醸成する」を付け加えました。

これらを基盤としての主だった実績は「英語教育の拡充による、学生の成績の大きな伸長」「障がいのある学生への就学支援の推進、学習環境の維持と向上」「積極的な就職支援により年間130回を超える就職支援プログラム開催」「現代の学びのスタイルに伴う図書館システムの更新、視聴覚設備の改修やコンピュータ音楽室の移転と機材の拡充」「現状に対応したセキュリティシステムの強化」です。今後も【Student First】を軸として議論を深め、順次具体化に取り組んでまいります。

本学の年内入試(AO、特別指定校、指定校、音楽推薦、KCH推薦、公募制推薦、クローバー推薦、帰国子女、社会人)は無事終了いたしました。明確な志望動機を持つ受験生も多く見られ、好調な滑りだとなりました。クローバー推薦入試(対象者は志願者の祖母、母もしくは姉妹が、神戸女学院諸学校を卒業、在籍している者で、神戸女学院のかけがえ

のない校風や雰囲気を世代を超えて守り育むことを目的としています)への志願者も増加しました。音楽学部では、新たにウインドオーケストラ部門の楽器の専攻にも門戸が開かれました。伝統の上に新しい風が流れることに期待しております。

就職ランキングにおきましては、私立大学の中では未だトップクラスであり、学生、教育を含めた大学の社会的評価・信頼が高いことは大変喜ばしいことではありますが、明治、大正、昭和期には、日本有数の最高水準の女子教育機関とされていたことを思いますと、更なる飛躍を目指し、その方向性といかに対応してゆかが問われています。今、世界は、数値や技術の発展に加えアーツからの視点も重要視されてきているように感じます。効率性や生産性が重視される時代にあつてこそ、そうではないものにも目を留めたいと思います。本学のリベラルアーツ教育のもと知性・感性を磨き、豊かな心、人間力、判断力としなやかな対応力をそなえた女性として、卒業生の国内外でのリーダーとしての活躍に期待し、「今、ふたたび、神戸女学院!」と、声を上げたいのは私だけでしょうか?

創立150周年に向けていよいよカウントダウンに入ります。学院では具体的なグランドデザイン構想に向けての意識が高まってきております。150年の歴史と伝統のその先へ、希望に満ちて力強く羽ばたくものでなくてはなりません。神様のみ旨により与えられた場所に、学生、教職員、同窓生が愛校心と誇りを持って繋がり、活気に溢れ、地域・社会に開かれた大学としてのシンボルとなるような大きな可能性と夢の膨らむ殿堂がデザインされることを、皆の期待とともに、願い祈ります。

批判を疑え。

「何かを批判している」が、無意識に、己を批判しているのは、なぜだろう。  
 いつのまにか批判が、非難になっているのは、なぜだろう。  
 批判の目的は何だろうか。この世を、少しでも良くするための批判になっているだろうか。  
 「まだ知らないことがある」として謙虚になる。  
 「何かの疑いもあるかもしれない」として、しなやかになれるように。  
 この世界が完璧じゃないから、疑わないとこあるんて、いくらでもあるのだから。  
 それを見つけただけで偉大になるか、どうすれば高くなるだろう。主観向きになるか。  
 批判風ではなく、当事者であるために、私たもは、学びつづける。

私はまだ、私を知らない。  
 神戸女学院大学

### 大学広告「批判を疑え。」

昨年より続けております大学広報の電車掲載広告ですが、本年度は9月にJR並びに阪急(全線)に掲出しました。

KCCだより

KCC-JEE は、来年2020年9月に創立100周年を迎えようとしています。神戸女学院をサポートするシカゴ、アメリカにあるNPOとしてこのような小さな団体が続いてきたことは、神戸女学院卒業生にとって、特にアメリカ在住者として、本当にありがたい機会に恵まれていることと思います。また、母校の国際的な繋がりやの深さを誇らしく感じます。前々回から続き、今回もKCC-JEEがどのような団体として活動しているのかを紹介させていただきます。

**\* Bryant Drake Guest Professor、Internship Program、2つのプログラムについて、担当役(Dr. Cindi SturtzSreetharan, 杉浦 香様)からの記事を以下に記します。**

#### Summary:

The Bryant Drake Guest Professor, formerly named the Bryant and Alberta Drake Guest Professor at Kobe College, is an endowed chair at Kobe College which was established in 1982 in honor of Rev. Bryant Drake. Rev. Drake was a member of the Kobe College Corporation Board of Directors in 1948 and served as President from 1954-1970. He was actively engaged in higher education as a one-time college president. He also served as an administrator for the United Church of Christ. In 1961, Rev. Drake was awarded the Fourth Order of the Sacred Treasure by the Japanese Government for his services on behalf of education in Japan.

Today, the Bryant Drake Guest Professor position consists of a visiting guest professor for one year at Kobe College. The position is filled every other year. Thus, in 2018-2019 Dr. Vanessa Ward was chosen as the BDGP in the Faculty of Intercultural Studies at Kobe College. The next BDGP will begin his/her appointment in October of 2020. The receiving faculty rotates among the various Faculties at Kobe College according to their needs and desires.

#### Schedule of recruitment and/ or program process

Typically we learn which Faculty will be receiving the BDGP in the early summer of the year

prior to the BDGP being in place at Kobe College. So, in the case of Dr. Ward, we learned in May of 2017 that the Faculty of Intercultural Studies would be the receiving Faculty of the 2018 BDGP.

In August of the recruitment year, the KCC-JEE BDGP Committee drafts a job description based on the needs and desires of the receiving Faculty at KC. This draft advertisement goes back and forth until it is finalized. Ideally, we would like to begin advertisement in mid-October, but we can start later as necessary based on the timing of the final documents.

The BDGP position is advertised in various higher education recruitment venues that are most appropriate for the disciplinary training requested. Thus, it varies over the years where we advertise. But, in addition to advertisement in typical higher education venues, we also spread the word through personal and professional connections. As with many things, this often proves fruitful.

We usually allow up to 2 months for advertisement at which point the KCC-JEE BDGP Committee will begin to review applications. A top 5-7 applicants are selected for phone (or Skype/Zoom) interviews. From these top 5-7 we narrow it down to 2-3 candidates. We interview these candidates in person as much as possible. In the case of Dr. Ward, she was located in New Zealand and thus an in person interview was not possible. In that year (2017 recruitment), all candidates save for one, were outside of the US making in person interviews impossible due to budgetary constraints. In this case, we held 75-90 minute Skype interviews with video.

After interviewing the 2-3 top candidates, we draft a document which describes the advantages and disadvantages of each candidate. This document is sent to the receiving Faculty at Kobe College who makes the ultimate decision about which of the finalists to hire. We then reach out to the top candidate and put them in touch, directly, with the Kobe College Faculty who do final negotiations and details.

BDGP typically arriving in Japan in late

September or early October, in time for the second semester.

### How many applications do we receive?

The number of applications seems to vary greatly depending on the kind of disciplinary training that is desired by Kobe College receiving faculty. For the 2017 recruitment in the Faculty of Intercultural Studies we had upwards of 80 applicants (if my memory is correct). The prior instance, recruitment in 2015, the receiving faculty was the Faculty of Human Sciences. They sought a person who was an expert in child play psychology or child play therapy. The applicant pool was much smaller. Despite the smaller applicant pool, the applicants we did interview were highly qualified.

Like other places, the situation of academic life is changing. It is becoming increasingly difficult for faculty to leave their home institutions for an entire year without suffering a loss of time to service and salary, among other benefits. Thus, when the BDGP was first started, it was far more common for senior faculty to take a visiting position in a foreign country and do teaching and research. These days it is becoming more and more difficult to do this kind of thing.

### What is the most important point when you decide the candidates?

The most important aspect of a candidate, for us on the BDGP committee, is finding someone who is excited to be in Japan and teaching young Japanese women. We also look for candidates who have experience with international students at their home institution. This helps us understand the willingness of a person to engage in negotiating cultural differences, language differences, and coursework goal differences. It is important that the BDGP not be too pre-occupied with his/her own research agenda but be eager to engage and collaborate with students and faculty at Kobe College.

### Relationship with past BDGP and KCC-JEE

We have typically had past BDGP on the KCC-JEE Board of Directors. Marjorie Kinsey for example and Rob Mason are two past examples. Marjorie still helps greatly with the BDGP Committee work. She has been a BDGP twice in the past. Currently we do not have an active past BDGP as a member of KCC-JEE. We are working on changing this. We find that past BDGP have a strong connection to Kobe College and tend to enjoy working with KCC-JEE to make sure that future BDGP are top candidates.

Cindi SturtzSreetharan

### Bryant Drake Guest Professor プログラム (BDGP/ブライアント・ドレーク客員教授)

以前は Bryant and Alberta Drake Guest Professor at Kobe College と称していましたが、Bryant Drake 博士の功績を称え、神戸女学院での寄付講座として、1982年に設立されたプログラムです。Drake 博士は、1948年から KCC 理事の一人で、1954年から1970年の間は、KCC 会長としてご活躍いただきました。また大学学長として高等教育へ積極的に従事し、United Church of Christ での管理者としてもご奉仕されました。1961年には、Drake 博士は、日本での教育活動への功績で、日本政府から勲四等瑞宝章を叙勲されました。

今日では、ブライアント・ドレーク客員教授は、1年任期の客員教授として神戸女学院に派遣されます。この採用は、隔年です。2018年から2019年は、Dr. Vanessa Ward が神戸女学院 国際文化研究の教授として選ばれました。次の BDGP 客員教授の任期は、2020年10月からはじまります。受け入れ学科は神戸女学院内での要望を基に多岐にわたる学科の中から順繰りとなります。

### 募集の時期

神戸女学院での BDGP プログラムがはじまる前年の初夏くらいに BDGP 客員教授の受け入れ学科を神戸女学院から知らせます。2018年から就任した Ward 女史の場合は、国際文化研究の学科が受け入れ先であることが2017年5月に判りました。

採用時の8月には、KCC-JEE のブライアント・

ドレーク客員教授 (BDGP) 派遣委員会は、神戸女学院での受け入れ先からの要望を基に職務内容に関して案を練ります。この募集案の最終決定まで KCC-JEE と神戸女学院は何度もやり取りをします。10月半ばには案内をはじめよう予定していますが、時には、最終書類の整い具合で案内の時期を遅らせることもあります。

BDGP 選考案内は、神戸女学院より要望された学科、専門分野に最も適切である高等教育機関に知らされます。今までに、いろいろなところへお知らせを出していますが、口コミとプロフェッショナルな繋がりを通して伝えられています。そのことも、候補者成功の要因です。

案内を出して2か月ほど経ってから、BDGP 委員会は、応募書類の選考をはじめます。まず5人から7人の候補者を選びスカイプ、Zoom も含めて電話でのインタビューをおこないます。この5～7人を2～3人までに絞り込み、可能な限り直接面接をします。

Ward 女史は、ニュージーランド在住でしたので、対面での面談は不可能でした。2017年採用時は、1人の候補者を除き他候補者はUS国外にあり、予算の制約もあり、対面は不可能なため、75分～90分のスカイプでのビデオインタビューをおこないました。

2～3人の最終候補者を面接した後、それぞれの候補者の長所、短所を説明した報告書を作り、雇用するための最終決断の決め手となるよう受け入れ先の神戸女学院学部へ送付します。その後、KCC-JEE 担当部署から神戸女学院の選んだ最終候補者に連絡を取り、神戸女学院学部との最終交渉と詳細の打ち合わせができるように橋渡しをします。

BDGP は、後期からスタートで、9月末、あるいは、10月初旬に着任します。

### KCC-JEE が受け取る応募者の数

神戸女学院の受け入れ先が要望する分野によって、応募者の数は、大きく増減します。

2017年募集時は、国際文化研究で、80人の応募がありました(私の記憶に間違いが無ければ…) 2015年募集時は、人文学の研究でした。児童行動心理学か、子どものプレイセラピーの専門家を探していました。そのため、応募者の数はずいぶん減少しました。少ない応募者にも関わらず、我々が面談した応募者

たちは、大いに条件を満たしていました。

どこの分野でもあるように、アカデミックの分野も変わってきています。自分の研究機関を1年間不在にすることは、勤続年数、給料、その他の手当てなどの減少無しには、大変難しくなっています。BDGP をはじめたころは、研究者が外国で客員教員として教えたり研究することは当たり前のことでした。最近では、このようなことは、どんどん難しくなってきています。

### 候補者選考に当たって、大事なことは?

KCC-JEE 担当部署での候補者選考で最も大切にしていることは、日本で過ごすこと、日本人の若い女性への教育機会にわくわくできる方を見つけることです。また自分の研究機関での留学生との交流経験を持つ候補者を探しています。文化の違い、言葉の違い、成果ゴールの違いなどに対して、立ち向かっていこうとする意欲ある候補者を見出すことができます。BDGP 客員教授は、本人の研究のみに没頭されているのではなく、神戸女学院での学生、教員たちと協力しあうことに熱意を燃やせることが重要です。

### 過去の体験者と KCC-JEE の関係は?

過去に BDGP プログラム経験者は、KCC-JEE での理事として活躍していただいています。Marjorie Kinsey 先生、故 Rob Mason 先生は、例となるお2人です。Marjorie 先生は、今も BDGP 委員会の活動に大きく関与しています。現在、KCC-JEE 理事に BDGP 経験者はいません。この状況を変えようとつとめています。私たちは BDGP 経験者は、神戸女学院との強いつながりを持ち、また未来の BDGP が最高の候補者であることを確信するために KCC-JEE と働くことを楽しみにしていると認識しています。

BDGP 委員会 Cindi SturtzSreetharan

### インターンシップ プログラム

In the year 2000, several Kobe College professors visited the United States by the invitation of KCC-JEE to observe the programs of a few women's colleges. One of the ideas both parties discussed was the programs that sponsored students for internship abroad. At that time, no other colleges in Japan offered such a program. The

KC delegates and KCC-JEE board members developed the Four Week KC-KCC International Internship Program, co-sponsored by KCC-JEE and the English Department of KC, later moved to Career Center of Kobe College.

For the first several years, participation was limited to students who planned to pursue careers in education. It has since expanded to include students from other disciplines, and has been moved from February to August to be accommodated as many students as possible who has higher aptitude in English.

The Internship Committee screens and selects appropriate sites, and works with them on creating internship positions for KC students. At the moment internship sites are JST of America and the Chicago Japan America Society, but the committee is looking forward to resuming internships at Anderson Japanese Gardens and Daikin Industries of America. The site coordinators are responsible for finding volunteer host families for the students (volunteer hosts are invariably more invested in their guests than paid host families) and facilitating that relationship. Host families offer KC students a glimpse of America family life and culture, and many have forged close friendship in the process. Site coordinators also host the interns for their first couple of days in the States to get them acclimated before they go to their host families, and they check in with the students periodically during the entire four weeks.

My husband and I through the Internship Committee always find joy in serving KC and its students and helping them experience the culture of the US through work and family, and also watch the students gain confidence in themselves.

Kay Sugiura

2000年にKCC-JEEの発案で神戸女学院大学の教授方がアメリカの女子大学視察に渡米なさった折の話し合いの一つに、如何にすれば神戸女学院大学のユニークさを強調し、学生たちに英語力をつけることができるかという課題の下に作り上げられたのがKC-KCC International Internshipでした。



杉浦 剛 (元評議員)・香 夫妻

最初の10年は教育家志望の学生たちが春休みに特にシカゴ近辺の小中学校で先生の補助をする仕事をしながら日本文化の紹介をし、アメリカ的な教育法を学ぶのが目的でした。ただしシカゴの寒い2月の気候が耐えられなく、インターンシップは夏季休暇中におこなわれることになりました。アメリカの新学期は9月ですので学校でインターンシップをさせていただくのは無理ということになり、日米協会、YMCA、赤十字、日本庭園、フェアトレードの店等のNPOが主なインターンシップ先でしたが、近年Daikin、JSTなどの日本企業でも見学、勉強をさせていただくことになりました。

インターンシップは神戸女学院とKCC-JEEとの共同のプログラムで、神戸女学院側では英文学科、後にキャリアセンターが学生の選考と派遣を司ってくださっています。KCC-JEE側の責任としてはインターンシップ先を選び、インターンシップ委員会の地域コーディネーターが4週間のインターンシップ期間中ホストをしてくださるボランティアの家庭を見つけ、学生たちが滞在中、全ての責任をもつことです。

「自分にこの仕事ができるかしら」と毎年恐々アメリカに来る数人の学生たちが4週間後にはひとつの自負心を得た女性に変化するのを目の当たりにしたり、インターンシップ後に学生たちがホストファミリーと文通したり、訪問したりするのを見ることに生き甲斐を感じます。

この貴重なお仕事に関与させていただいてから20年間、神戸女学院の同窓生として、また、神戸女学院同窓生の母と祖母をもつ夫と共に関わらせていただけたことを幸せに思っています。

インターンシップ委員会 杉浦 香

## <追悼>津田 庄八郎先生

林 真理子

2019年10月11日、元中高部長の津田庄八郎先生が95歳で天に召されました。

先生は1924年のお生まれで、大阪帝国大学ご卒業後、兵庫県立・神戸市立高等学校で教鞭を取られた後、1963年に本学院中高部数学科教諭として着任されました。先生は軽妙な話術と卓越した教授力で数学の魅力を生徒に伝えてくださいました。「ちょっと不細工かも」とおっしゃりながら、黒板にフリーハンドで完璧な円を描いておられる御姿や、複雑な回転体の体積を求める問題を解説するために、断面図の形に切り取ったボール紙を割り箸に接着し、両手で高速回転させてくださった御姿が昨日のこのように思い出されます。私の高2の時、担任をしてくださった津田先生は、学生運動の最中、時として反抗的になる生徒に寄り添い、ユーモアで荒ぶる心を溶かし、クラスをほのぼのとした雰囲気にもまとめてくださいました。

日本最初の女子サッカー部創設に尽力されたことでも有名で、2011年なでしこジャパンW杯優勝の際、朝日新聞の取材に「当時は、女子生徒にボールを足で蹴ることから教えました。僕らがまいた一粒の種が大きな根を張り、こんな大木になった。夢のようです。」と話しておられます。

先生は1985年から教頭として、1988年から1990年まで中高部長としてお働きくださいました。生徒が自由に心豊かに学べるよう、学習環境を整え、温かくご指導くださった先生に思いをいたし、先生の天上の平安とご家族ご関係の皆様の上に神様の豊かな慰めがあるよう、お祈り申し上げます。

(中高部長)

## 重要文化財 神戸女学院 特別見学会

2014年9月18日に、神戸女学院岡田山キャンパスのウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計による17棟のうち現存する12棟が、国の重要文化財に指定されました。今年是指定5周年となるのを記念いたしまして、9月28日(土)に、株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所のご後援を得て、特別見学会を開催いたしました。

院長の飯謙先生の講演「ヴォーリズー岡田山で語られていること」に引き続き、普段は公開されていない理事室を含むキャンパスツアーが開催されました。図書館では一粒社ヴォーリズ建築事務所からこの日のために貸していただいた、ヴォーリズが手がけた原図面4面、そして図書館所蔵の貴重な歴史史料の数々を展示いたしました。晴天に恵まれ、約400名の方にご参加いただきましたことを感謝をこめてご報告させていただきます。

指定と同時に、キャンパスの一般公開の折などにツアーの案内役を担う「学生ツアー・マイスター」の養成を開始、今年は6期生20名がデビューを果たしました。

(総務部長)



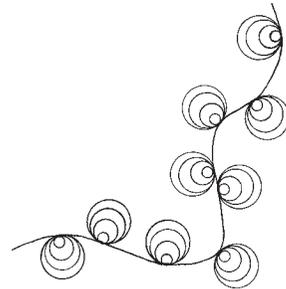
## 故 Margaret Larson 先生記念植樹式

11月6日(水)11時20分から Margaret Larson 先生(故 David Larson 先生夫人)記念植樹式がおこなわれた(ラーソン先生ご夫妻については本誌掲載史料室の窓50参照)。

晴天の下、音楽館前にアメリカから来日されたご遺族14名を含む約50名が集った。讃美歌560番を歌い、司式の中野敬一学院チャプレンによって多くの宣教師の先生方の働きを覚えて祈りが捧げられた。ラーソン先生ご夫妻は人生の大切な時期を神戸女学院に捧げてくださった。学院は多くの人々の祈りと支えによって歴史を積み重ねてきた。この記念樹を通してその人々の働きを心に刻みたい、と飯謙院長が挨拶された。続いてご遺族、学院関係者、KCC理事、旧教職員の方々が順に記念樹の根元に土を入れていった。そしてご遺族を代表してご息女 Kathy Larson 氏が日本語で挨拶され、アメリカでの記念会の際に作った団扇を配られた(団扇の片面には先生が生まれ育った中国の風景が描かれている)。最後に讃美歌560番1節を歌って植樹式は終了した。

場所をジュリア・ダッドレー記念館会議室に移して12時から懇談の時もたれ、34名が集った。松永千香院長室課長司会で英語讃美歌68番を歌い、中野先生の祈禱の後会食がはじまり、和やかな雰囲気の中、ラーソン先生の思い出を語り合った。13時30分それぞれの思い出を胸に散会となった。

(神戸女学院史料室 佐伯 裕加恵)



ご息女 Kathy Larson 氏の挨拶

## 学院リトリート

暑さも本番を迎えた中、7月26日(金)に学院リトリートがおこなわれました。学院リトリートとは、学院の教職員を対象に、キリスト教主義や建学の精神について学ぶことを目的としたプログラムです。

今年度は、広島女学院より院長・学長の湊晶子先生をお招きし、「いま、なぜキリスト教女子教育か」と題してご講演いただきました。冒頭ではキリスト教史の概要と、女性への制約が多い時代に日本のキリスト教女子教育機関が設立された背景についてご説明くださいました。

先人たちが目指したものは、リベラル・アーツ教育に基づくキリスト教女子人格教育でした。真に重要なものは人との間での相対的な評価ではなく、神の呼びかけに自主自律的に応答する「ぶれない個」の確立であると先生はおっしゃいました。そして、「ぶれない個」を軸に、多様なライフキャリアを実現できる素養を身につけた女性を育てることが、キリスト教女子大学の使命であると語られ、最後は「日本の女子教育の担い手として、共に力の限りを尽くそう」という熱いメッセージで締めくくられました。

会の後半にはグループごとに意見や疑問を共有し、有意義なひと時を過ごしました。短い時間ではありましたが、本学院に連なる教職員が、それぞれに与えられた使命を見つめ直す機会を与えられたことに感謝します。

日 時：2019年7月26日(金) 14:00～16:00

場 所：H-301教室

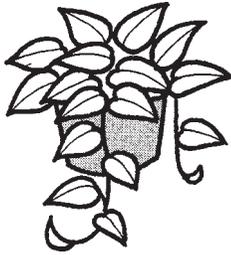
参加者：134名

講演：湊 晶子 氏（広島女学院 院長・学長）

開会礼拝：大門 光歩

全体司会：中野 敬一

(チャプレン室)



学院リトリートの様子

## 2019年度 宗教強調週間

## プログラム

(11月11日～11月15日)

- 11月11日(月)  
 早天祈祷会 文学部 総合文化学科 2年生  
 中高部礼拝 学院チャプレン 中野 敬一  
 チャペルアワー 中野 敬一
- 11月12日(火)  
 早天祈祷会 高等学部 2年生  
 中高部礼拝  
 「『与える』ということ」  
 カトリック司祭、元清泉女子大学教授  
 米田 彰男  
 チャペルアワー  
 「ノリメタンゲレ ー非接触・非破壊ー」  
 米田 彰男  
 全教職員礼拝  
 「イエスの食卓」 米田 彰男
- 11月13日(水)  
 早天祈祷会 文学部 総合文化学科 3年生  
 中高部礼拝  
 「だいじょうぶ、だいじょうぶ」  
 国立がん研究センター中央病院  
 緩和医療科 小嶋リベカ  
 チャペルアワー  
 「ゆらぐこと、おさまること」 小嶋リベカ  
 中高部PTAのための宗教講話  
 「変えられること、変えられないこと」  
 小嶋リベカ  
 学生寮夕拝  
 「Be Water」  
 日本基督教団神戸聖愛教会宣教師 林 美恩
- 11月14日(木)  
 早天祈祷会 高等学部 3年生  
 中高部礼拝 中高部チャプレン 大門 光歩  
 チャペルアワー 学院チャプレン 中野 敬一  
 同窓生のための宗教講話 院長 飯 謙  
 ※アジア農村指導者養成専門学校校長 荒川 朋子氏によるご講演を予定していましたが、事情により変更となりました。
- 11月15日(金)  
 早天祈祷会 文学部 総合文化学科 3年生  
 中高部礼拝 音楽礼拝  
 ソプラノ 緋田 芳江  
 ピアノ 山内 雅子  
 オーボエ 樋口 成香  
 アッセンブリアワー「宗教音楽の会」  
 音楽学部元教授 Boris Bekhterev

## &lt;大学チャペルアワー&gt;

今年度は11月11日(月)～15日(金)を宗教強調週間とし、特別礼拝をまもりました。11日(月)は中野敬一学院チャプレンによる奨励でした。2019年度年間標語に基づき、自分本位に目先の利益を追うのではなく、未来の隣人のために心を注ぐという視点を持ってほしいと呼びかけられました。

11月12日(火)はカトリック司祭、元清泉女子大学教授の米田彰男氏をお招きしました。「ノリメタンゲレ ー非接触・非破壊ー」と題されたお話は、ある有名映像作品の主人公の生き様にイエスを捉える、という興味深い内容でした。私たちも、神様に未来の可能性を確信された者として、それぞれの道を歩んでいこうという気づきを与えられました。

13日(水)は国立がん研究センター中央病院緩和医療科の小嶋リベカ氏より、「ゆらぐこと、おさまること」と題してお話いただきました。私たちは心がぐらついている時、自分の弱い部分にのみ目を向けがちです。しかし、考え、悩んだ経験を通して、人は新しいものの見方を獲得するのだと語られました。さらに、不完全で弱いありのままの私たちを、誰よりも真っ先に受け入れてくださる神様の愛が傍にあるのだとおっしゃいました。

14日(木)には、アジア農村指導者養成専門学校校長の荒川朋子氏をお招きする予定でしたが、ご事情によりキャンセルとなったため、中野学院チャプレンによる奨励に変更となりました。先生がキリスト教を信じるに至った、人生と経験についてお話くださいました。15日(金)は「宗教音楽の会」として、本学音楽学部元教授の Boris Bekhterev 氏によるピアノコンサートがおこなわれました。

12日(火)の全教職員礼拝では、米田彰男氏に「イエスの食卓」と題してメッセージをいただき、続けて永年在職者表彰式がおこなわれました。長年ご奉仕くださった教職員の方々へ感謝のひとつをもちことができました。

13日(水)の学生寮夕拝では、日本基督教団神戸聖愛教会宣教師の林 美恩氏により、現在香港で起こっている抗議活動について映像を交えながらお話いただきました。正義を追求する一人ひとりの思いが繋がると、社会を変革できる大きな力に成り得るのだと語られました。

期間中、毎朝8時から早天祈祷会がまもられ、若き姉妹たちの証を聴くことができました。また、学生・生徒による奏楽のご奉仕をいただきました。共に祈るひとときを神戸女学院に連なる者でまもることができ、大変嬉しく思います。

ご多忙の中お越しくいただき、講演をお引き受けいただいた講師の先生方には深く感謝いたします。恵みに満ちた1週間となりましたことをご報告申し上げます。

(チャプレン室)

### <中高部礼拝>

11月11日(月)は中野敬一学院チャプレンから、年間標語聖句にあるように将来のための種蒔きをする生き方についてお話いただきました。私たちが経験している恵まれた学びの機会が、先人たちの種蒔きの結実であること、そして、私たち自身が将来に何を残してゆくのかを考えなければならないということをお話されました。

12日(火)は米田彰男神父から、「『与える』ということ」というテーマで奨励をいただきました。阪神淡路大震災の時のボランティア活動の様子や、神谷美恵子氏の生涯を通して、「与える」という決断を重ねてゆくことの貴さを教えていただきました。

13日(水)は小嶋リベカ氏から、「だいじょうぶ、だいじょうぶ」というテーマで奨励をいただきました。「『独り』の対義語は、『誰かが一緒にいる』ということなのだ」という言葉から、心強さを確かめ合い、伝え合うという生き方を教えてくださいました。小嶋先生は午後にはPTA向けにもご奉仕くださいました。「変えられること、変えられないこと」というテーマで、子どもとの関わり方を中心にお話ししてくださいました。

14日(木)は荒川朋子氏のご事情により来校できませんでしたので、大門光歩チャプレンから「神によって『良し』とされる世界で」というテーマで奨励がありました。

15日(金)は音楽礼拝で緋田芳江氏、樋口成香氏、山内雅子氏にご奉仕いただき、恵まれたひと時となりました。

早天祈祷会では12日(火)にS2の生徒が、14日(木)にはS3の生徒が奨励を担当してくださいました。お二人からは、教会での経験や、祈りについて、隣人に対するまなごしのあり方について語っていただきました。

また中高部では放課後にも「白熱教室」と題して特別プログラムを実施いたしました。

今年度は「世の光として生きる」というテーマで開催しました。11日(月)は自治会主催の「ジョギング!!」、13日(水)はKCメディカルの大林千穂氏、14日(木)は同志社大学名誉教授の望田幸男氏、15日(金)は中高部出身の建築家・津川恵理氏をお招きし、どの会も大勢の参加者を得て、白熱教室の名にふさわしい、活発な議論がなされました。ご奉仕くださったすべての方々に感謝申し上げます。

(中高部宗教委員会)



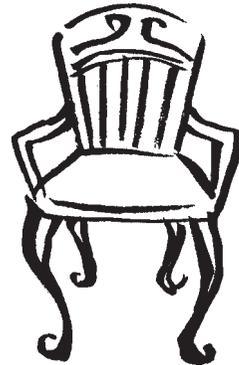
## &lt;留学報告&gt;

## ペンシルバニア州立大学への留学

Nathaniel CARNEY

ペンシルバニア州立大学教育学部に2018年から1年間 visiting scholar として渡航した。その間、Dr. Elizabeth Smolcic との共同プロジェクトを主だった研究とし、米国就労外国人に対する English learning curricula 及び、Dr. Smolcic が主導する TESL Certificate Program のデータコレクションに携わる。TESL Certificate Program のデータコレクションはエクアドルで英語を学ぶ学生に対して英語を教えるプログラムである。その後、プログラムに参加したペンシルバニア州立大学の学生にインタビューをおこない、これらのデータを分析研究している。また、Dr. Smolcic とペンシルバニア州立大学で農業科学を専門とする教授とチームを組み、酪農業に従事する米国就労外国人に英語を教えるプログラムを考案、そのカリキュラム作りを主導した。尚、TESL Certificate Program のデータコレクションは現在、Dr. Smolcic と共にマニスクリプトの段階にある。TESL Certificate program は最も関心を寄せたプログラムであると同時にこれまで目を通し得なかった文献、分析データにアクセスできた貴重な体験であり、異文化間のコミュニケーション能力研究への理解を深めるに至った大いなる成果である。TESL Certificate program は今後も注力したい研究というだけでなく、神戸女学院大学でも工夫、活用しえる要素を備えており、TESL Certificate program 参加への意義は大きいものであると推測される。米国への研究留学によってアクセスし得た膨大なりソースは知識を更に深め、今後の指導及び研究に著しく有用な経験であった。

(英文学科准教授)



史料室の窓(50)

## ラーソン先生を覚えて

神戸女学院史料室 佐伯 裕加恵

音楽館前に2本の記念樹があります。元音楽学部教授デイヴィッド・ラーソン先生(David Larson, 1926-1987)と奥様のマーガレット・ラーソン先生(Margaret Larson, 1932-2019)を記念して植えられています。

デイヴィッド先生は1987年12月29日に亡くなりました。この時先生は神戸女学院大学音楽学部教授で院長顧問でした。しかし私にとって先生は音楽学部教授ではなく、デフォレスト先生(Charlotte Burgis DeFoest, 1879-1973)の書かれた神戸女学院英文75年史 *The History of Kobe College* の続きを執筆して英文100年史を完成させようとしていた歴史家でした。当時、史料室には『神戸女学院百年史 総説』の朗読テープがありました。先生が英文100年史を書くための資料として作成されたそうです。

教え子にとっての思い出は授業についてでしょう。コーラスや音楽鑑賞のほかピアノも教えられました。先生の授業を通して生きた音楽や知識が身に付いたといいます。またセシリアンクワイアを組織して毎年夏、演奏旅行に出かけて学生たちにたくさんの演奏の場を作ってくださいました。中でも忘れられないのは指揮法と教会音楽で、特に教会音楽の講義では、先生の研究の素晴らしさと信仰の深さを毎回のように感じたとか。学生たちにとって先生は、音楽にとどまらず、生きることそのものを教えた人生の師であったと言えるでしょう。

神戸女学院にとっても先生は特別な方でした。大学で3度にわたり教鞭をとられました。初来院は1954年、宣教師として赴任し、音楽学部教授として1968年まで14年間学生の指導に当たりました。帰国後、1970年から1984年までの間、アメリカの神戸女学院支援団体 Kobe College Corporation (KCC—現 Kobe College Corporation - Japan Education Exchange—KCC-JEE)の理事や会長をつとめ、学院とKCCのコンサルテーションの日本での開催、100周年募金、中高部生徒のための Home Stay Program 推進や Bryant Drake Guest Professorship 創設など、アメリカに在って神戸女学院の教育のために尽力されました。1975年、神戸女学院創立100周年記念式典にはKCC会長として来院されています。2度目は1981年から客員教授としての1年間です。そして3度目は1985年から音楽学部教授として教鞭をとられ、と同時に院長顧問として国際交流推進のために活動し、さらに英文100年史の執筆にもとりかかったところで、志半ばにして亡くなられました。



Dr. David Larson



Mrs. Margaret Larson

先生の貢献は学校の外にも広がっています。ご専門の教会音楽の分野では、日本基督教団発行の英語讃美歌 *Hymns of the Church* (1963) を編集されました。ここには日本人作詞作曲による作品が英訳で載せられ、海外でも優れた讃美歌集として評価されました。また、合唱、指揮法の分野では、教え子たちが日本各地で活躍し、東京、京都、神戸、広島などの大学合唱団、民間合唱団、さらには京都、大阪、関西の交響楽団なども指導を受けています。そして日本にとどまらず、中国でも合唱団、交響楽団を指導したとのこと。そんな先生の記念樹は1998年に植えられました。

マーガレット先生は宣教師2世。お父様は中国で伝道活動に従事されました。アメリカで高等教育を受け、デイヴィッド先生と結婚、教育宣教師として神戸女学院に赴任します。中高部で宣教師として、また英語の先生として若い生徒たちの教育に尽力されました。3度目に来院された時、先生はこんな言葉を残しておられます。1954年に夫と共に新しい懸け橋として来て以来、岡田山と神戸女学院は異国ではない。3人の子どもたちはここで生まれ、日本を故郷と思っている。中高部、大学でも非常勤として教えた。最近18年間は、日本と神戸女学院は私の生活の一部になっている、と。

デイヴィッド先生の早すぎる死ののち、マーガレット先生はアメリカに在って、東洋との懸け橋としての活動を続けられてきました。そして2019年3月11日、アメリカでお亡くなりになり、ご遺族の希望によって、デイヴィッド先生の記念樹の近くに記念植樹がおこなわれました。

## <キャンパスお気に入りの場所>

### 感性が研ぎ澄まされる空間

総務館の南玄関ロビーは、上品な気品にあふれた場所です。階段の両脇には、奇跡的に残された街灯風照明があり、何気なく上階を見上げると、階段を降りてくる人が螺旋状に回転して見え隠れし、幻想的な感覚を覚えます。さらに、懐古的な心情にさせる手摺りをもち、会衆派教会の意匠を表した三つ葉マークのステンドグラスを見上げながら階段を上ると、厳かな緊張感を抱きます。

館内は窓から差し込む自然光と、暖かい電球色のライトが混ざり、程よい薄暗さ加減で、私たちをリラックスさせてくれます。薄暗さゆえに、インスピレーションが湧いてきて、想像力をかきたてられます。また、館内に声が響かないように、自ずと小声で言葉を選んで話します。耳を澄ますと静寂なチャペルから、清廉な祈りの声が聞こえてくるように感じます。このような場所で過ごしていると、いつしか五感が研ぎ澄まされ、感性が磨かれるようになります。

また、階段の横には、年季が入った黒い鉄製の郵便受けがあります。それは、芸術性の高い建築物と、なぜかマッチして佇んでいます。創建時の頃は宣教師の先生の郵便受けとして使用されていたものだとは知ると歴史の重みを感じます。無機質なものでも、語り継がれていくストーリーがあると、命のぬくもりすら感じるのは不思議なことです。総務館は建物に込められた人の思いや願いがひしひしと伝わってくる場所なのです。

(教職員相談室)



総務館階段

### 岡田山で森林浴

神戸女学院には4つの門があります。そのうち通常の通行は正門と西門に限定されていて、谷門や北門は朝の通学時を除いて施錠されるようになりました。

ところが、昨年までのことですが、来校者に事前に正門から大学までの道順を連絡していたにも関わらず、自身で地図検索サイトを頼りに谷門から入ってしまう、大学の校舎に辿り着くまで学内で迷ってしまうことが2度もありました。迷った人たちはさぞかし不安だったと思いますが、部屋に入ってホッとすると「こんな自然の中にあるとは知らなかった。いい散歩ができました。」という感想が。幸い天気の良い日だったので、まわり道もいい気分転換になったようです。

自然を感じるという点では、谷門辺りはお勧めスポットです。中高部時代には生物の授業で使うミミズを探したり、木の实や腐葉土を集めに行く場所でした。今でも、門を入り、まず目に飛び込んでくるのは背の高い木々。その間に石敷きの道が続きますが、校舎はすぐには見えてきません。生い茂った木に囲まれて、鳥の鳴き声が聞こえてくると、学校ではなく森の中にいるように錯覚します。晴れて陽が差し込む日には本当に気持ちの良いところになります。

学生時代は時間に追われて慌てて登った道ですが、今はのんびり空気を味わいながら歩く私のお気に入りの場所です。

よく晴れた日に岡田山の森をぜひ体感してみてください。リフレッシュ効果抜群です。

(教職センター)



谷門からの通学路

## 大学報告

### 英語科教育法における 学生による模擬授業

教職課程科目である3年次学生対象の英語科教育法では、学生は前期に英語教育理論を学び、後期に実践面を鍛えるために模擬授業をおこなう。手順としてまず中学校1年生と高等学校1年生の教科書を題材に、担当箇所の単元の教材研究をおこない、指導案を作成する。特に中学校用には“all English”の授業を準備するが、これは本学の伝統であるオーラルメソッドに基づいた方法である。学生は最初、先輩が作成したA4サイズ70頁にもおよぶ指導案を見て驚愕する。しかし自分たちで先生と生徒のせりふを全て書き込んだ台本のような指導案を作成し、さらに指導教員による2度の添削・個別指導を経て内容を工夫するうちに、学生は指導案の書き方や授業で使用する英語を学び、授業の組み立て方を身に付ける。これは他大学ではあまり例をみない神戸女学院独自の方法である。このような土台を作り上げてから学生は模擬授業に挑む。分厚くなった指導案を手に、模擬授業のために練習を重ね、当日は凛とした姿勢で中身の濃い授業を展開する。教育実習を終えた4年次学生も応援に駆け付け、模擬授業の後は、教育実習校でさらに良い授業ができるようにと活発な意見交換がおこなわれる。授業の様子は撮影され、各自それを見て反省点をまとめる。学生はここで英語教師としての技術や指導法の実力を身に付ける。教壇で慌てる学生もいるが、生徒役としてゼミ教員や友人が参加する等、緊張の中にも温かさが感じられる時間でもある。

(英文学科教授 白井 由美子)



中学校1年生英語模擬授業風景

### ホニアラ市長ら一行が本学を視察訪問

さる9月25日(水)、ソロモン諸島から来られた一行が本学を訪れました。ソロモン諸島は南太平洋の島国で、首都ホニアラ市はガダルカナル島にあるといえ、わかる人もいるでしょう。西宮市に拠点を置くNPO ことも環境活動支援協会 (LEAF) が、そのホニアラ市で2014年から JICA 草の根技術協力事業をおこなっています。今回、その招きにより、市長をはじめ学生を含む一行が、西宮市の環境学習を研修する目的で訪日し、本学では環境・バイオサイエンス学科の教育研究の内容を視察されました。

この JICA の事業は、行政と市民が環境問題に取り組める体制づくりを支援するプロジェクトです。私も昨年その協力者として同地を訪問しました。首都とはいえ人口6万ほどですが、道路のわきにはおびただしいごみが散らばっていました。JICA の支援により、街中のごみ収集はようやく軌道に乗りはじめていましたが、集積された廃棄物の山はすでに満杯になっていました。小さな島国にとって持続可能な社会をつくるのが喫緊の問題であることを実感させられる光景でした。

一行は、学長との挨拶の後、同学科の張野宏也教授、人間科学研究科の大学院生らの説明で、微量化学物質の測定機器や毒性試験をおこなうメダカなどの飼育施設、生物多様性の研究に用いる昆虫標本などを見学しました。大学での研究内容についての熱心な質問もあり、短い時間でしたが、貴重な交流の時間をもつことができました。

(環境・バイオサイエンス学科教授 遠藤 知二)



昆虫標本を見学する市長一行

## 神戸メロンパンコンテストで 増田製粉所賞を受賞

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 1年生

神戸メロンパンコンテストは神戸ならではのラグビーボール形メロンパンを広めるために、「地元とラグビーを盛り上げよう」というテーマでオリジナル神戸メロンパンのアイデアを競うコープこうべ主催のコンテストです。今回はお料理研究部の1年生6人が予選に参加し、最終選考会では代表3人がプレゼン発表をおこないました。

私たちが考えたオリジナル神戸メロンパンは「神戸の蜂蜜を使った～ハニーチーズメロンパン～」です。生地には蜂蜜とレモンエッセンスを練り込み、クリームにはモッツアレラチーズを選びました。蜂蜜は美容や疲労回復効果、チーズはミネラル豊富でラグビー選手や観戦者の熱中症を予防することができます。また、最近では若者を中心にチーズを使用した料理が流行しているので若者にも注目してもらえようと考えました。さらに、マスコットキャラクターを製作しPR方法や販売方法についても考案しました。

最終選考会ではプレゼン発表をおこない、実際に試作したオリジナル神戸メロンパンを審査員の方々に試食していただきました。トップバッターということもあり緊張しましたが、審査員の方からお褒めの言葉をいただきとても達成感がありました。そして、締め切りのぎりぎりまで案を出し合い、熱心に取り組んだ甲斐もあり増田製粉所賞を受賞することができました。商品開発は決して簡単なことではありませんでしたが、また機会があれば挑戦したいです。



増田製粉所賞受賞

## <留学生紹介>

### 私はまだ、私を知らない

神戸女学院大学は「国際化の推進」の目標のもと、交換留学生数が増えることで国際交流を更に活性化したいと願っています。2019年9月には新たに11名の交換留学生を米国（ボーリンググリーン大学・サムヒューストン大学）、英国（イーストアングリア大学）、韓国（淑明女子大学・徳成女子大学）、中国（広東外語外貿大学）、台湾（文藻外語大学）から迎えました。2019年前期から留学中の台湾からの1名と合わせて、現在12名の交換留学生が在学中です。交換留学生の学生寮滞在のために、今年度も家庭会から経済的ご支援をいただいております。この場をお借りして改めて厚く御礼申し上げます。

さて、交換留学生たちがなぜ神戸女学院への留学を希望するに至ったのか、理由・きっかけは様々ですが、中には本学の電車広告「女は大学に行くな（という時代があった）」が気に入ったからという留学生もいます。その広告の中のことばを用いるならば、国際交流にも「正解はない」と言えるでしょう。そして日常的に多くの「迷いや葛藤」「不確かさ」に直面することになるのが留学生活なのかもしれません。

創立以来「国際理解」を教育の柱のひとつとしてきた神戸女学院で交換留学生の皆さんが「不確かさを自由として謳歌するために学ぶ」ことができるように、そして彼女たちとの交流を通じて本学学生もまた日本と世界、自分自身についての新しい発見・学びをしていただきたいと心から願っています。

（国際交流センター課長）



斉藤学長との懇談のひととき

## &lt;受入留学生報告&gt;

## The exchange experience

アサンプシヨン大学交換留学生

I am honored and pleased to write this message to everyone. Today, as I write this message I am probably back in my country, the Philippines. I want to bid farewell to everyone who became a part of my exchange program here in Kobe College. I just want to start off by saying how thankful I am for having this opportunity. I came in Japan last April, 3,066 kilometers from home, my family and friends and basically my old life. No words could express how grateful and blessed I am to have had this opportunity to study abroad even if it is just for four months. Doing this exchange program definitely made me a confident young adult. It provided me the opportunity to get to know people in a new community and develop wonderful relationships. As I return back home, I would say that I am already a different person. By different I meant being more mature. I have gained so much independence and I have a whole different understanding of what another culture is like. Most importantly, I have learned that people maybe different the world over, but they are just the same too. Given that, I want to thank all the people who added value to my exchange experience. Thank you also for my loving parents who supported me all the way and for making all of this possible. Without you, I won't be able to enjoy and have a successful completion of this opportunity. Thank you Kobe College. Your sweet memories will forever remain in my heart. This is definitely not goodbye. It's see you again.

## 神戸女学院での留学生活

梨花女子大学交換留学生

神戸女学院大学での留学生活が終わってからもう2ヶ月がたちました。まだ日本に行く前に感じた胸のときめきや、心配などを覚えているので、留学生活が終わったことが信じられません。

日本に行く前には様々な期待と不安で、神戸女学院大学での生活を心配していました。外国での生活も、一人暮らしも初めてだったので不安感はさらに大きくなりました。しかし、日本に着いて初めて会ったバディたちと、一緒に留学生活をすることになった留学生みんなが優しく話しかけてくれました。そして国際交流センターの方たちも住民登録や学校の授業登録などを親切に手伝ってくださったので、とても安心しました。

学校の寮での一人暮らしで辛いこともありましたが、楽しいことも多くありました。大切な思い出もたくさん作ることができました。今でも忘れられない思い出は、学校に初めて入ったときのことです。山を登ったら現れた、童話みたいな綺麗な学校の姿を今でも思い出します。そして留学生のみんなとケンウッド館で過ごした5日間です。留学生のみんなと一緒にスーパーに行ったことや、雨の日に綺麗なカフェに行ったこと、居間に集まってご飯を食べたことがとても大事な思い出になりました。

留学生活はすでに終わりましたが、神戸女学院大学で出会った皆さんとの繋がりや、たくさんの思い出はしっかり心に残っています。短い間でしたが、この思い出は一生忘れられません。

## 私の大切な思い出

徳成女子大学交換留学生

私は徳成女子大学からまいりました。2019年4月から2019年7月まで神戸女学院大学で留学生生活をしました。

私は日本語を専攻していますが、韓国では実際に日本語を使う機会が多くないため、ここに来て日本語で授業を聞いたり、いろいろな人と話したりすることができて嬉しかったです。先生や友人が「タピる」、「ちゃうちゃう」のような教科書では学べない言葉を教えてくれたとき、微妙なニュアンスの違いなどを説明してくれたときは本当に嬉しかったです。

日本語だけでなく、旅行で来た時にはできなかった経験をするのもたくさんできました。興味があった日本の文化について知り、韓国語の授業に参加する特別な経験もしました。普通に買い物に行ったり、電車に乗って、本屋や映画館に行ったことも大切な経験でした。

初めて神戸女学院に着いた頃には、新しい環境で生活することが心配でした。しかし、親切な先生方とバディたち、「仲良くなりたい」とやさしく話しかけてくれた人たちのおかげで楽しい留学生活をすることができました。また、いろいろな国から来た留学生のみんなと話し合ったり、仲良くなって本当に嬉しかったです。みんなと一緒に遊びに行ったり、おいしいものを食べたり、話し合った時間一つ一つが全て大切な思い出です。

神戸女学院で留学した4か月が思ったより短くて、すぐみんなと別れる時間になってしまって残念でしたが、短い間でも本当に大切な思い出をたくさん作って帰ることができました。神戸女学院で過ごした4か月の時間は一生忘れられません。ありがとうございました。

## 桜色の夢

揚州大学交換留学生

4ヶ月の留学生活があつという間に過ぎてしまいました。未知の生活への不安がいっぱいでしたが、ここに来てから、満開の桜と皆さんの温かい笑顔が目に入りました。そして、桜色とも言える4月がはじまりました。

日本に来た理由はいくつかあります。一つは自分の日本語能力を高めたいこと。二つは人見知りの癖を変えたいこと。三つは日本の風俗文化に深く触れたいこと。私は心理学の授業を受講しました。中国の学校で自分の興味のあることを学ぶ機会がなかったので、日本でこの機会があつて嬉しいです。論文の授業は自分にとってとても役に立つと思います。これからすぐ4年生になります。卒論の問題に直面しますが、この授業を受けたので、自信がつかしました。図書館には原作の本がたくさんあります。日本の本は値段が高いので、こんなにたくさん本を無料で読む機会があるということはとてもありがたいです。先生方はとても親切で、困ったときにいろいろ助けてくれました。

勉強のほかに、暇な時間に近くに遊びに行ったり、お祭りに参加したりしました。京都の祇園祭と大阪の天神祭は、人が多すぎて花火を見ることができませんでしたが、祭りの雰囲気を楽しむことができて面白かったです。神社が大好きなので伏見稲荷大社、湊川神社、その他にも神社やお寺などに行きました。

4ヶ月の時間が過ぎるのは早すぎたので、今振り返ってみたら、やり残したことがいっぱいあると言わざるを得ません。でも、たくさん友人と知り合い、たくさんいい思い出を作りました。それが私の宝物です。本当にありがとうございました。

## &lt;派遣留学報告&gt;

ロックフォード大学

## C. A. B. (Campus Activity Boarder)

文学部 英文学科 3年生

私はロックフォード大学での留学期間中、たくさんの人との繋がりを作るためにとにかくいろいろなことを積極的にしてみました。中でもクラブ活動に力を入れ、神戸女学院大学では何のクラブにも属していないことの反動かわかりませんが、ロックフォード大学では5つ以上のクラブに属していました。そして特に私の中で印象に残っているのが Campus Activity Boarder (通称 C.A.B.) というクラブです。C.A.B. はキャンパス内のイベントを企画から運営までのお仕事クラブなのですが、私立大学のロックフォード大学ではとにかくイベントが盛んな上に豪華なので、実際は私が想像していた数千倍の労力を必要としました。そしてそのハードワークのおかげで私はかけがえのないものを得られました。それは人との繋がりで、そしてそれはいろんなイベントに参加したからだけではなく、このクラブの一員という自覚も私の世界を広げてくれる大きな要素でした。というのは、私はおそらくずっと外国から来たゲストという立場であつたら人との関りをそれほど広くしようとしていなかったと思います。そうではなく、イベントのホストという立場だからこそ人ともっと繋がって楽しんでもらおうと思えたのだと考えています。積極的に自分の立場を変えたからこそ味わえた経験を、私はこれからも大切に次の新しい世界を探究したいと思います。



C. A. B. のメンバーと

イーストアングリア大学

## Importance of cherishing ourselves

文学部 英文学科 3年生

2018年9月から9ヶ月間、イギリスのイーストアングリア大学へ派遣留学をしました。この大学を選んだ理由は、本学から1名だけ行ける、そしてイギリスの雰囲気が自分に合う気がする、という直感でした。選考の条件を満たせるよう1年生の時から本学の授業や語学検定に真剣に、楽しみながら取り組もうという目標を掲げていました。ようやくイギリスに行けることが分かった時、心の底から喜んだことを今でも覚えています。

現地では、自分の興味のある国際政治学、ジェンダー学、翻訳学、哲学や英語を履修しました。どの授業でも印象的だったのは、学生たちが意欲的に自分の意見を発信していたこと。日本にいと、自分の意見や考えを隠す人が多いように感じますが、イギリスでは、逆でした。最初はカルチャーショックを受け、周り自分と比べ、自分のできなさに落ち込んでいましたが、留学生活に慣れてくるにつれて、現地の学生や人々がしていた、『自分を大切にすること』の重要さに気づきました。自分のやりたいこと、思っていることを、躊躇せずに挑戦し、発信することで、毎日が彩り、一日一日を楽しむことができました。サークル活動や、スピーチコンテストにも参加し、たくさんの国の友人と出会えました。

いろんな感情を経験したからこそ、今の自分に成長できたと思っています。この留学で学んだことは自分や他人を愛することです。一生の宝物になりました。

## ポーリンググリーン大学

## 最高の経験

文学部 総合文化学科 3年生

私は2018年8月から2019年5月までアメリカのポーリンググリーン大学に派遣留学しました。留学を決めた理由はたくさんありますが、一番はエスニシティについて学びたいという思いでした。日本では同一民族しかいないという通念があるように思われます。外国人人口は増え続けていますが、彼らを受け入れる体制はまだまだ整っていません。そんな中、移民を歴史的に受け入れてきたアメリカで日本語ではしばしば民族と訳されるエスニシティの勉強をし、差別の問題や異なる文化習慣を持つ人々がどのように共生してきたかを学び、それを踏まえて日本はどうすべきかを考えたいと思い、アメリカ留学を決意しました。実際にエスニシティについて学んでみると移民の国と称されるアメリカも歴史的に共存と排除が繰り返されていたり、差別が残っていたりしてショックを受けることも多かったです。しかし、エスニシティや人種に関係なく交流している人々もたくさんいて希望を持つこともできました。

本を英語で9冊読んだり、エッセイをたくさん書いていたりするのはとても大変で、初めての海外ということもあり、ほかにも苦労することがたくさんありました。しかし、いつも友人が励まし、助けてくれました。のどかなオハイオの田舎の中、協力的な教授のもとで貴重な学びができたこと、そして友人と助け合い、また刺激を受けつつ楽しく有意義な時間が過ごせたことは私の人生の宝です。この経験を活かし、今後も学びを深め支えてくださった人々に恩返しができるようにしたいです。本当にありがとうございました。



ケリーズアイランドにて

## ワイオミング大学

## ジェンダーについて考える

文学部 英文学科 3年生

留学先のワイオミング大学で長年思い描いていたジェンダーについて学ぶという目標を叶えることができました。授業で特に印象的だったのは、ワイオミング大学の学生が同性愛者であることが理由で殺害された事件からヘイトクライムについて学んだことです。同性愛者嫌悪を象徴する事件として全世界に大きな影響を与え、LGBTQへのサポートやマイノリティの方々のカミングアウトへの後押しになったことを知りました。この事件から人間の尊厳についてとても考えさせられました。また別の授業では、音楽とジェンダーとの関係性からアーティストのセクシュアリティがどうその当時の社会に大きく影響を及ぼしたのかについて学び、Androgyny（両性具有）という概念に興味を持ちました。この授業から両性具有により現代の若者のジェンダーレスに対する理解が深まり、男性・女性らしくならなければならないという概念が当たり前ではなくなるのではないかと考え、K-POP男性アイドルグループにおける両性具有に焦点を当て卒業論文課題としました。ジェンダー学を通して私たち若者一人ひとりがジェンダーについて学び、考え、理解することで誰もがより良い社会で自分らしく生きることができる環境を作ることができるのではないかと思います。そして決して否定するのではなく様々な生き方もあるのだということを理解し、受け入れることが大切ではないのかと考えることができました。



授業で使用した教科書や資料

## 揚州大学

## 中国で学んだ人との関わり方

文学部 英文学科 4年生

2018年9月から2019年7月まで、中国の揚州大学へ留学しました。私は、3年生の時に広東外語外貿大学へ留学したので、今回は2度目の中国留学でした。

今回の留学で「人に頼ること」の大切さを深く知りました。日常会話に問題がなくても、まだまだ人に頼らなければできないことは多くありました。例えば、中国語で受ける専門教科の授業、揚州なまりの先生や町の人の発音、他の中国学生と同じようにパワーポイントの発表や何千字のレポート、どれも初めは全くついていけず、自分の力だけではできませんでした。その時に、「できない。もうだめだ。」と落ち込むのではなく、「初めての経験だから、分からないことは聞いてみよう。できなければ友人や先生に頼ろう。」その姿勢が人とのつながりや友情を生んでいきました。クラスメートとは毎週課題を一緒にしたり、言葉や文化を教えあったりと、いい関係を築くことができました。中国は特に、人との縁や繋がり、助け合いを大切にす文化だと身をもって感じました。中国語の上達だけでなく中国文化を肌で感じ、違いに揉まれより深く理解できたことはこの留学での一番の収穫だと感じています。

2年間の留学での学びを、就職活動では自信をもって強みとして生かすことができました。2度も留学の機会をくださった神戸女学院大学、支えてくださった国際交流センターの皆さま、家族に感謝しております。本当にありがとうございました。

## 徳成女子大学

## 新しい自分との出会い

文学部 英文学科 3年生

今年の2月末から6月末まで、韓国の徳成女子大学に派遣留学をしました。留学に行くことと決めた当初から、より実践的に韓国語を学びたいと考えていた私にとって、学部の授業をメインに受けられるこのプログラムを通じて留学できたことは、とても貴重な経験であったと感じています。現地の学生に一人混じって勉強することに、もちろん不安もありましたが、親切な教員の方々や友人のお陰で最後まで頑張ることができました。試験期間には、大学に残って夜通し勉強する学生たちの姿を目の当たりにし、意識の高さに驚くと同時に、刺激になりました。また、色々な人との出会いも充実した留学生活を送れた理由の一つとなりました。当初、想像より韓国語で会話する機会が少なく焦りを感じていましたが、そこで初めて、自分がこれまでいかに受け身な人との付き合い方をしてきたかということに気付かされました。自分から積極的に人とコミュニケーションを取るよう意識してからは、いつの間にか友人が増え、韓国語を話す機会もどんどん増えていきました。その中でも、とくに私を気に掛け、仲良くしてくれた友人とは、本当にたくさんの思い出ができました。一緒に早朝から特急電車に乗って海を見に行っただ日は、一生色褪せることの無い大切な思い出です。この4か月で得た多くの学びは、残りの学生生活に活かされていくことは勿論、今後の人生を歩んでいく上でも様々な形で役立つていくと信じています。

## &lt;認定留学報告&gt;

オーストラリアカトリック大学

## 貴重な10か月間

文学部 英文学科 3年生

2018年8月から2019年6月まで、オーストラリアカトリック大学メルボルンキャンパスに認定留学をしていました。

大学では幅広い分野の授業を選択でき、特に印象に残っているのは児童文学の授業です。私は英語教員を目指しているので、児童文学が子どもたちに与える影響を学ぶことができ興味深かったです。また、オーストラリアの大学では一つの科目が講義とチュートリアルというディスカッションの授業とに分かれています。私が受講していたクラスは現地の学生がほとんどで、専門的な知識や用語が使われるチュートリアルでは毎回ついていくのに必死で苦労しました。課題もエッセイを書くことが多く、初めは一つのエッセイを仕上げるのにかなりの時間がかかりましたが、留学後半になると慣れることができました。このスキルは卒業論文やこれからの神戸女学院での授業に役立てたいです。

留学中はオーストラリア人の家庭でホームステイをしていました。日々の会話の中で私のミスを正してくれたり、学校では学ばないような単語を教えてください、楽しく英語を学ぶことができました。友人に関しても、放課後にある学校のイベントなどに積極的に参加し、オーストラリア人以外にも留学生の友人が沢山できました。

留学中は慣れない環境ということもあり、大変なことも沢山ありましたが、周りの人たちのおかげで良い時間を過ごすことができました。この貴重な経験を今後活かしていきたいです。



クイーン・ビクトリアガーデンにて

## &lt;夏期語学研修報告&gt;

カリフォルニア大学アーバイン校

## 夏期語学研修を終えて

文学部 英文学科 3年生

私は今年の夏、アメリカの西海岸にあるカリフォルニア大学アーバイン校の語学研修プログラムに参加しました。私がこの語学研修に参加したきっかけは、長い夏休みを利用して今までできなかった新しいことに挑戦してみようと思ったからです。いざ語学研修がはじまると、環境や文化、言語の違いを日々の生活の中で感じるようになりました。特に言語の壁には留学中一番苦労をしました。日本でのリスニングテストの英語が聞き取れるようになったと思っても、現地の方はその何倍も早く話しますし、様々なアクセントを持った方々がいるため、中々上手く聞き取れない場面も多々ありました。また、咄嗟に自分の言いたいことが英語で出でこず、会話の流れが途中で止まってしまうこともあり、心が折れそうになった時もあったのですが、アメリカで生活をしていくうちにだんだんと英語を聞き、話すことに慣れはじめ、最終日にホストファミリーに初日に比べて英語が上手になったと褒められた時はこの1ヶ月間向上心を持って頑張ってきた良かったなと思いました。英語力を高められたことに加えて、ずっと行きたかった様々な観光地に行けたことや日本にいたら出会えなかった人たちと出会い、日本に帰った今でも連絡を取り合う友人ができたことがとても嬉しいです。この1ヶ月間は長いようでとても短い1ヶ月間でした。この研修で過ごした日々は自分のこれからの勉強に繋がる貴重な経験だと思います。



卒業式の日にはクラスのみんと

## ケンブリッジ大学

## 2019年度 ケンブリッジ大学夏期語学研修

文学部 英文学科 2年生

今回1ヶ月間の短い期間でしたが、実際に現地に行き色々な人と英語でコミュニケーションを取りながら生活をし、わずかな期間でもたくさんの吸収ができました。

現地での授業は1週間に5日みっちりと言語、文化について学びました。言語の授業ではスピーキングに特化した授業でした。文化の授業では実践型の授業が多く、実際にイギリス料理を自分たちで作ることもありました。日本の授業スタイルとはまた違ったかたちで、クラスメイトとコミュニケーションを取りながら楽しく進みました。郊外授業ではアフタヌーンティーをしたり、美術館へ行くなど、とても有意義な時間でした。

ホームステイでは現地の生活スタイルや食文化の違いを見つけることができました。毎回の食事には手作りの家庭料理をふるまってくれ、子どもたちは好奇心旺盛に日本についての質問をしたり、知らない単語を教えてくれたりと私にとってとてもいい英語の先生になってくれました。

1ヶ月間現地の方の家で生活をし、それぞれの国の違いを沢山見つけました。また、自国と他国の問題は実際に日本を出て自分の目で確かめることで分かることがあり、実際に経験することから得る実感が本当に大切だと感じました。またより深くその国の情報を得るためにも英語をもっと学びたくさんの人とコミュニケーションをとりたいと思いました。留学に行かせてくれた両親、また研修の準備を応援し手伝ってくれた友人に感謝します。

## ヨーク大学

## トロントでのキャンパスライフ

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 2年生

私がヨーク大学の夏期語学研修を選んだ理由は、カナダへの憧れと寮生活というところでした。実際、寮生活を体験して感じた魅力は、放課後の行動が自由で息抜きができるということです。慣れない海外での生活の中で、寮に帰れば友人と話せて、ゆっくりと休めるスペースがあるのはとても快適でした。

初めの1週間は神戸女学院生だけのクラスでカナダの文化や発音の授業を受けます。少人数のため発言しやすく、積極的に学べます。2週目に入ると、他大学の学生と混ざり、レベル別のクラスでの授業がはじまります。約9割が日本人のため国際的な雰囲気とは少し違うと思います。授業内容はクラスによって異なると思いますが、どのクラスも共通して、ヨーク大学の学生にインタビューしてクラスでその結果を話し合う授業があります。それが数回あるのですが、初めてのときは緊張して1時間ほど時間があるのに2人に質問するのが精一杯でした。ですが、自分の英語が通じたときに喜びを感じ、段々と話しかけることが怖くなくなりました。

日本の学生生活とは全く異なるキャンパスライフを送ることができます。学内の規模も大きく、様々な人種の学生が共に学び、とても新鮮な雰囲気を味わえました。このプログラムには、学習以外にもヨーク大学の学生スタッフとの交流や観光など、本当に様々な経験をさせてもらえます。今、思い出してもとても充実した素晴らしい1ヶ月だったと思います。



最後の観光、トロントアイランド

## 西オーストラリア大学

## 言語の重要さ

文学部 総合文化学科 2年生

今回の語学研修を通して、言語を話すことの重要さを感じることができました。初めの1週間は慣れない環境の中でコミュニケーションがうまく取れず、自分が思っていることを正確に伝えられないことにストレスを感じていました。たとえそれが感謝を表す“Thank you”の一言であっても本当に私の思いは伝わっているのか、と言語の壁を感じました。しかし諦めずに自ら伝えようと会話に励みました。具体的にはホストマザーと日々の出来事を話し、気になったことや知りたいことをたくさん質問しました。そして、思いは言語を越えて伝えられるということを実感できました。また、私はこの語学研修をただの楽しい海外留学ではなく意味のあるものにしたと出発前から考えていたので常に向上心を持ち、何事にも積極的に取り組むように心がけました。例えば、私のクラスは日本の学生が多数を占めていましたが多国籍の方が4人いたのでグループワークでは同じグループになり、積極的に話すようにしました。さらに、中国人の同年代のルームメイトがいたので一緒に外出や会話をして、楽しい時間を過ごすことができました。私は第二外国語で中国語を勉強しているので中国語で会話することによって中国語にも触れることができました。この5週間で素晴らしい出会いがあり、国を越えて人のあたたかさを感じました。また、新しい場所で得た自信を活かして今後の生活をより良いものにしていきたいと思っています。



ホストファミリーとともに

## 昭和ボストンインスティテュート

## 夢見た語学研修

文学部 英文学科 3年生

ボストンで4週間の語学研修に参加しました。参加理由として、私は以前からアメリカに行くことが夢であり、現地で英語力を磨きたいという強い思いとアメリカの文化に触れてみたいと思ったからです。

昭和ボストンでの生活は寮でした。周りは自然豊かで治安が良く、近くにショッピングモールもあり毎日充実していました。授業では、先生は現地の方でしたが、クラスメイトはみんな日本人でした。そのためできるだけ日本語を話さないように、英語を積極的に使うように心がけました。先生は親しみをすかしたです。私は午前の授業で会話がメインで文法などを学び、午後の授業はホスピタリティについて勉強し、よくフィールドトリップに行きました。特に心に残ったことは、日本航空のフィールドトリップです。空港や機内で働いている様子を見学し、実際にチェックインカウンターでお客様の対応をおこない、また日本航空でのおもてなしを学びました。やはり海外のお客様がほとんどで、英語で対応することはとても難しかったです。ですがそんな時でも笑顔で挨拶すると、感謝の言葉をいただき、とても嬉しくお客様に喜んでもらえたという実感を得ることができました。私は航空系の職業に憧れていて、国際交流を踏まえ、本当に貴重な体験ができました。

今回の研修は学びたいことを沢山吸収できて、とても価値のある語学研修になりました。この経験を活かして今後の自分に向けて努力し、役立てていきたいと思っています。



クラスメイトと修了式にて

## 音楽学部夏期講習会報告

2019年度音楽学部夏期講習会は、7月27日(土)～30日(火)の日程で開催いたしました。本学の音楽教育への取組を少しでも多くの皆さんに知っていただき、実際の指導現場を体験してくださることを目的として今年の講習会には190名が参集し、本学の多彩な授業体験や、キャンパスの雰囲気を感じ取り、取っていただく機会になったことと思います。



講習会のスケジュールは、器楽専攻、声楽専攻及びミュージック・クリエイション専攻については、聴音のテスト、楽典の授業と、各専攻教員による個人実技レッスンを実施しました。また寺澤 彩先生(ハーブ)、鬼一 薫先生(声楽)、蛭川千佳先生(ピアノ伴奏)のミニコンサート、さらに、Xavier Luck先生(フルート)、岡田 将先生(ピアノ)のミニコンサートに耳を傾ける楽しいひと時となりました。



また舞踊専攻はリズム・ソルフェージュ授業、そして教員陣による実技レッスン指導。また島崎 徹先生のアドバイスタイムがおこなわれました。



(音楽学部事務長)

## 夏期インターンシップ実施報告

インターンシップは、学生にとって、実際の仕事や職場の状況を知り、自己の職業適性や職業生活設計など職業選択について深く考える契機となります。本学では、多くの企業や自治体・団体のご協力を得て、キャリアセンターが学生に就業体験をおこなう機会を提供しています。

ひと口にインターンシップと言っても、営業同行のような形で実際に就業体験をおこなうものから、グループワークなどを通じて課題に取り組みプレゼンテーションをおこなうものまで、多種多様なプログラムがあります。学生は自分の志望業界や体験したいプログラムに応じて、各種インターンシップに参加します。

この夏のインターンシップでは、以下の企業、自治体・団体の皆様のお世話になりました。記して、心より感謝の意を表します(かっこ内は受け入れてくださった本学学生数)。

兵庫県経営者協会/兵庫県庁(5名)/兵庫県警察(1名)/神戸市(1名)/加古川市役所(1名)、姫路経営者協会/姫路ホテルマネジメント(1名)/神姫バスツアーズ(1名)/姫路市まちづくり振興機構(1名)/まねき食品(1名)、和歌山県経営者協会/紀陽銀行(2名)、福井県経営者協会/福井銀行(1名)/福井市役所(1名)/福井県予防医学協会(1名)/合同経営会計事務所(1名)、西宮市(1名)、関西環境管理技術センター(2名)、三井住友海上火災保険(3名)、大阪シティ信用金庫(1名)、尼崎信用金庫(2名)、野村證券(8名)、名鉄観光サービス(1名)、日本旅行(2名)、姫路信用金庫(1名)、法務省人間科学系インターンシップ/横浜少年鑑別所(1名)/大阪少年鑑別所(1名)、北海道庁(1名)、北海道障害者職業センター(1名)、山口県インターンシップ推進協議会/山口放送(1名)、徳島県(1名)。KCC/KCインターンシッププログラム/Japan America Society of Chicago(1名)/J.S.T. SALES AMERICA INC.(1名)。

学生のインターンシップに対する関心は高く、5～6月におこなわれたインターンシップガイダンスとインターンシップ選考対策講座①～④には、合わせて1,479名の参加がありました。また、アメリカに学生を派遣するKCC/KCインターンシップの説明会、及び派遣学生による報告会にも、合わせて60名程度の学生が集まりました。

こうした熱心な要望に応え、今後とも、学生の精力的な活動を励まし続けたいと考えています。

(キャリアセンター)

## <インターンシップ参加報告>

### インターンシップ参加報告

文学部 総合文化学科 3年生

8月上旬、三井住友海上火災保険株式会社で、4日間のインターンシップに参加しました。最も学び得たことは三井住友海上の魅力を手感できたこと、そして自分自身の成長です。同時に、新たな自分の弱点、今後の課題も発見することができました。

内容としては、ビジネス講座からはじまり、営業、損害サポートなどありましたが、それぞれの業務の意義を身をもって学ばせていただきました。特に営業や損害サポートのロールプレイングを通して、「カタチのないもの」を提案することの難しさ、やりがいを感じられたことは貴重な体験でした。グループワークでは他の学生のレベルも高く、負けずにはがんと奮闘しました。チームで上手くやっていくのは容易くありませんでしたが、それでも自身の意見を発信し、他人の意見にも耳を傾け、さらに考えを発展させていくということを常に意識しました。それらを真剣におこなうと、とてもチームが盛り上がり、自分がどのように動いていくとよいのか、その大切さがよく分かりました。チームで最終プレゼンに向けて協力する中でも人との関わり、どう相手に伝えるとよいか、自分の立ち位置など基本的なところから考え、学ぶことができました。

今回インターンシップで得られた機会や学びは就職活動はもちろん生涯において貴重なものとなりました。今後就職活動で人との関わりが増える為、4日間の経験を存分に活かしていきたいと思います。

### KCC/KC インターンシップ

文学部 英文学科 3年生

私はアメリカのイリノイ州にある JST Corporation でのインターンシップに1ヶ月間参加させていただきました。JST の本社は大阪にあり、世界中に拠点のある会社で、主に自動車やスマートフォンなど、幅広く使われるコネクターを製造しています。期間中は、Visa の関係で仕事体験はほとんどできませんでしたが、たくさんの部署を見学し、製品や仕事内容についてのレクチャーを受けていました。

私は品質管理の部署に所属していたので、どのようにして製品に欠陥できるのかや、その対策、お客様対応などを教えていただきました。インターンシップ初日から、膨大な量の専門用語や現地の方の話すスピードについていくのは本当に大変でした。はじめの2、3日は、とにかくついていくのに必死でしたが、慣れていくにつれて自分からすすんで質問をしたり、自分の意見を述べたりして、メーカーのお仕事についての知識をより深めることができました。最終評価で、スーパーバイザーに積極性や英語力を褒めていただいたときは本当に嬉しく、達成感がありました。

毎日たくさんの新しいことに出会い、積極性を持って行動することの大切さを実感した1ヶ月間でした。最後になりましたが、この素晴らしい機会を作ってくださった KCC のみなさま、キャリアセンターの方々、先生方、そして受け入れてくださった JST のみなさまに心から感謝しています。この経験を最大限に活かし、これからの学校生活や就職活動を精一杯頑張ります。

## 2019年度大学教授会研修会報告

大学では毎年教授会研修会を開催し、大学教育の諸問題について学びあう機会としています。今年度は、後期授業開始直前の9月23日(月)、講師として本学英文学卒業生で、現在、博報堂コンサルティングアジアパシフィック上級ブランド戦略担当をはじめ、ブランドコンサルタントとして国際的に活躍していらっしゃる信岡裕子先生をお招きし、「2025年に向けて―神戸女学院大学のブランド価値を考える」をテーマに開催しました。

信岡先生のご講演と学科別ワークショップを組み合わせた午前中のプログラムでは、ブランディングの基本と大学ブランディング事例を学ぶとともに、日本の女子学生を取り巻く現状と今後についての認識を共有し、また本学学生の特徴を他大学と照らし合わせて把握しました。

午前中の現状把握をふまえて、午後の学科混成グループ討論では、本学の近未来を掘り下げて考えました。「愛神愛隣」「女子大学」「リベラルアーツ」「地域連携」「グローバル化」等から、グループごとにテーマを選び、2020年代にむけて本学がめざすべきブランド価値と、そのためのアクションについて話し合い、提案を出し合いました。

信岡先生が「本当は3日分の内容」とおっしゃるとおり、盛りだくさんなプログラムで、先生も参加者も「時間が足りない」と悲鳴を上げながら課題に取り組んだ1日でしたが、先生のパワーあふれるファシリテーションのもと、終始活発な議論が繰りひろげられ、今後の活動の指針となる多くの学びを得ることができました。

参加人数は大学教員60名、大学職員13名、法人7名、計80名でした。お忙しい中、終日講師をおつとめくださった信岡先生、会の準備にご尽力くださった皆さまに、心よりお礼申し上げます。

(FD センターディレクター)

## 2019年度岡田山祭「瞬華就闘」

～Share the Moment Share our Happiness

大学祭実行委員長

「瞬華就闘」～Share the Moment Share our Happiness をテーマに掲げた2019年度岡田山祭は、1日目はあいにくの雨でしたが、2日目は天候に恵まれ盛況のうちに幕を閉じることができました。今年のテーマには、一瞬で時が経ってしまう2日間の大学祭のために、自分の就いた役割に責任をもって奮闘し、またご来場いただいた皆様全員に華やかな気持ちになっていただき、素敵な時間を岡田山祭で共有できるようにという願いを込めました。この目標に対して、一人ひとりが目標を達成できたと強く思います。また、実行委員一同達成感を感じた2日間となりました。

委員長という立場に立つて学ぶことがたくさんありました。プレッシャーに負けそうになった時、私一人では解決できなかったこともみんなで一緒に悩み試行錯誤してきました。たくさんの困難がありましたが、私にとって大きな財産であり、素敵な経験をすることができました。たくさん助けてくれた実行委員には感謝の気持ちでいっぱいです。また、大学祭を開催するにあたり、ご支援ご協力賜りました学内外すべての皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

来年は今年以上そして、今まで以上の岡田山祭を後輩たちが作り上げてくれると思います。来年も是非岡田山祭へお越しください。



2019年度大学祭実行委員と共に

## 2019年度大学クローバー賞

あいにくの雨の中、岡田山祭のオープニング（10月25日（金））において「大学クローバー賞」の表彰式が実行されました。大学クローバー賞とは神戸女学院大学に在籍する学生の課外活動を奨励することを目的とし、顕著な活動や成績を収めた団体又は個人にその栄誉を称えて贈られる賞です。選考は9月30日（月）開催の連絡協議会において「課外活動報告書」に基づき、連絡協議会委員11名と大学学生自治会委員6名の投票によりおこなわれました。

今年度の受賞はチアリーダー部（Venus）、ラクロス部、ダンス部（Dance Lovers）、スカッシュラケット部、文芸部部长（個人）、聖歌隊（ハンドベルクワイア）〔以上 得票順〕の5団体および1個人となりました。中でもコーラス部とラクロス部の両部は過去21回の開催中17回目の受賞となり、日々の熱心な活動が連続受賞へとつながる結果となりました。また、今年は文芸活動における目覚ましい活躍により文芸部部长が個人での受賞となりました。

表彰式は、めぐみ会永井会長、小坂体育部顧問、西井自治会長、秋山自治会副会長、鈴木自治会体育部長、南脇自治会文化部長同席のもと、白井学生副部長の司会ではじまり、中野学生部長から受賞団体の発表の後、齊藤学長より各団体へ表彰状と賞金が授与されると、会場は受賞を称える拍手に包まれました。

今回受賞した団体も、今年度は惜しくも受賞を逃した団体も、今後の更なる活躍を期待したいと思います。

（学生生活支援センター）



歓喜に沸く受賞団体のみなさん

## 2019年度めぐみ会賞

めぐみ会では、大学生及び中高部生徒の自主的な活動を奨励するため、神戸女学院の立学の精神にふさわしい課外活動をおこなっている団体を対象とした「めぐみ会賞」を設けています。

本年度の大学受賞団体は、「I.S.A.（日本国際学生協会）」と「聖歌隊ハンドベルクワイア」です。「I.S.A.」は、フィリピンやベトナムをはじめ国内外でのボランティアを通して国際交流を深め、日本の魅力を発信する素晴らしい活動をされてきたこと。また「聖歌隊ハンドベルクワイア」は、数々の学内行事に花を添え、学外のコンサートへも積極的に参加するなど、益々その活動の幅を広げておられることなどが主な受賞理由です。

10月25日（金）の岡田山祭オープニングセレモニーで、永井敬子めぐみ会会長より受賞団体へ表彰状と賞金の授与がおこなわれました。今年のテーマ「瞬華就闘」にあるように、一瞬で過ぎ去る華やかで素敵な時間を皆で共有するために各自がそれぞれの役割に奮闘されてきたことは、永遠の大切な記憶として残ることでしょう。

なお、2018年度中高部受賞団体は、「JS 宗教部」と「秋の子ども会」でした。2019年度に関しては、12月に選考、1月に表彰いたします。「めぐみ会賞」は、クラブや同好会だけでなく、小さなグループも対象になります。来年度も多くのご応募をお待ちしております。

（公益社団法人神戸女学院めぐみ会

副会長 大黒 泰子）



大学祭にて永井会長より授与

## &lt;私の研究&gt;

## 私の研究

中野 敬一



キリスト教神学には、聖書・歴史・組織（教義）・実践の分野があり、実践神学が私の専門です。教会における実践活動に関すること、たとえば、礼拝や説教、礼典、教会音楽、牧会カウンセリングなどがテーマとなり、この研究

を通じて今日における宣教方式を探求することを目標としています。

私は「葬送儀礼」を研究してきました。教会の現場における大切なテーマであります。その意義や実践に関する研究は比較的少ないのが実状です。日本における葬送儀礼は主に仏教による一連の行事として定着しているので、キリスト教側が「それは仏教行事だから」として、その意義をよく考察せずに排除したこともその理由の一つでしょう。しかし、古代から日本人が受け継いできた死生観やそれを発展させた仏教等の姿勢には学ぶべきことは多々あります。それらを参考にしながら、聖書の思想や教義に即したキリスト教葬送儀礼の再構築が必要なのです。具体的には、仏教の法事（法要）にあたるキリスト教の「記念式」あるいは、通夜にあたる「前夜式」の意義や実践方法等に関する研究が求められています。

さらに今日の日本社会における葬送儀礼には大きな変化が生じています。「葬式不要論」や葬送儀礼の簡素・簡略化が広がっています。人が亡くなったら通夜や葬式を省略して、遺体を火葬場へ直接搬送するという「直葬」の選択も増えています。死生観の変化や経済的負担などの理由が挙げられますが、死者を「葬る」とか「記念する」ことを今後どうしていくべきか、私たちは問われています。

合わせて「墓」に関することも重要な研究テーマです。「墓じまい」という用語も登場するなかで、「埋骨の場所」という定義を超える墓の役割を捉え直し、キリスト教の墓について再考する作業をおこなっています。

(総合文化学科教授)

## 私の研究

島崎 徹



私の専門はコンテンポラリーダンス（現代舞踊）の演出、振付です。そこで私なりに今一番興味を持って取り組んでいる研究について書かせていただきます。ご存知かもしれませんが、クラシックバレエというのは一般的に、

言葉で表現できる物語を身体を使って表現するものですが、その中にもレ・シルフィードという作品に代表されるような例外となる作品があります。言葉で表現することのできないことや、純粋に音楽そのものを視覚化した舞踊の存在です。どちらかというとは私は今の時点で一人の振付家として、そのような作品に舞踊の真の意味での存在理由を感じています。つまり観客の知識に訴える作品というより、心にダイレクトに響くような作品を創ることが、ある意味私の作家としてのテーマなのです。作業そのものは、身体が持つコミュニケーションの可能性を探りながら空間に3次元的にラインを描いていく訳ですが、空間は舞台という大きさによって限られます。しかしその空間に存在する物や踊り手の人数などによってデザインは無限大に広がりを見せます。簡単にご説明すると、ミニチュアの日本庭園を思い浮かべていただき、舞台装置としての石を何処に置くか決めてもらいます。そこに何本かの盆栽を植えていくわけですが、その盆栽は植えた所に留まることはなく常に流動的に動くという世界です。なぜ盆栽かということ、普通に育った木に対して盆栽というのは木そのものが人工的にデザインされている分だけダンサーの身体に近いと考えるからです。その動く盆栽を使って舞台上に絵を描いていながら幾重にも重なる盆栽たちが編み出すデザインが自分の思い描く美であることを確認しつつ、そこに流れる音楽との関係性によって言葉では語るることのできない思いみいたいものを表現するということが、今私が一番興味を持っている研究の一つです。

(音楽学科教授)

## &lt;ゼミ紹介&gt;

## 小説文学を読む楽しみを深めあう

溝口 薫

英文学分野のなかでは英国の小説が主な研究対象です。ディケンズ、ジョージ・エリオット、ジェイン・オースティン、バージニア・ウルフなどの代表的作家、あるいはゴールディングやイシグロなどの現代小説家の作品、作家研究をおこないます。やはり今日的な話題であるジェンダーや人種、階級、またそれらが複合する問題を作品のなかに見出し、アイデンティティや人間同士の共生について考察する研究が多いです。しかし最近では、動物や人間以外の存在と人間の共生について考える研究も増えてきました。他に、シェイクスピア、ワイルドなどの演劇作品や、小説と絵画の影響関係なども、ゼミ生の関心に応じて研究対象としています。研究手法としては、作品固有の背景である歴史、文化、社会事象や制度に関するリサーチと、表現に注目して丁寧に読みわゆるテキスト分析を組み合わせるものが主流です。ゼミで特に大切にしていることは、どのような細部からでも全体の理解へと至ることができる小説文学の面白さに気づき、自由に探求をおこなうことです。またゼミ生同士の質疑応答を通して、それぞれの研究についての理解を深め合うこともゼミならではの貴重な機会ですので、研究以外の交流も大切にしています。例えば、毎年夏期休暇中におこなう一泊のセミナー合宿は、すべてゼミ生の企画によりおこない、各々の研究発表のあとは、バーベキュー、花火大会、飲み会など、おおいに語り合うひとときをもっています。

(英文学科教授)



夏期合宿—あとがもっと楽しみ！

## 豊かな心と広い視野をもって

水本 誠一

私の専門は精神保健福祉、ゼミでは様々な課題を個人の問題としてではなく多様なニーズという観点から見つめ直し、さらにそれらを社会全体の課題として捉え取り組む必要性を理解できる視点を涵養してきた。学生たちの注目する事象は社会情勢に敏感に反応し、そのことは卒業研究のテーマにも反映されてきている。もちろん母娘関係や父娘関係に注目したテーマへの関心度は高いが、ゼミでは統合失調症や気分（感情）障害に関連したテーマから心理的発達障害（学習障害や広汎性発達障害等）や児童虐待への関心が高まってきている。今年5月、WHO年次総会でICD-10（通称国際疾病分類）改訂が承認された。第5章「精神及び行動の障害」では、これまで精神障害として分類されてきた「性同一性障害」（性転換症、両性役割服装倒錯症等）が削除され、新設される第17章「性保健健康関連の病態」で性別不適合と分類される。ゼミではこの2年、本学入学可否に関する意識、さらに“受け入れ後に実際の課題はあるか”について考える機会を持ってきた。前者に関して生物学的に女性である場合については全員が、同男性である場合についても多くが入学可と考えていることがわかった。しかし入学後の課題について展開すると様々な課題が指摘され、その結果実質的に入学は困難かも知れないという意見に変わる学生が出た。このような展開には個々人の課題ではなく社会的課題として捉えてみる視点も重要であると思う。

(心理・行動科学科准教授)



SSTでそれぞれの課題をロールプレイする3年ゼミ生

## &lt;課外活動紹介&gt;

[クラブ]

I.S.A. (国際学生協会)

副部長

神戸女学院大学 I.S.A. では、現在 1 年生 15 人、2 年生 11 人、3 年生 3 人、4 年生 3 人の合計 32 人で活動をおこなっています。毎週金曜日に、甲南大学もしくは阪急西宮北口駅の近くにあるプレラ西宮で活動をおこなっています。

主な活動内容としては、ディスカッションや、日本語学校に通っている留学生と交流をおこなったりしています。ディスカッションでは、1 つのテーマを決めて、そのテーマについて深く話し合い、考える力を強くすることを目的としています。

長期休暇では、海外との国際交流をするプログラムが豊富にあります。私たち部員の中にも、ベトナムやインドネシア、フィリピンや韓国など現地の学生と交流をすることができる機会を利用し、海外に行く部員が多数います。海外へ行き、観光をしたり、時には農業や建設のお手伝いをしたり様々なことを体験することができます。海外の文化を肌で経験することで、新たな発見や視野を広げることができるのでとても充実した長期休暇を取ることができます。

私たち I.S.A. では部員それぞれがやりたいことをやり、成長することができる部活となっています。海外に行って帰ってきた部員がとても生き生きとした表情で帰ってくるように、やりがいを見つけることができるのがこの部活であると思います。

今後 I.S.A. は、部員一人ひとりのやりがいを作り出せる環境づくりに取り組みたいと考えています。



長期休暇の様子

## 神戸女学院大学

## マイバッグデザインコンテストを開催

世界で広がる SDGs (持続可能な開発目標) の動きに合わせ、深刻な海洋汚染の原因であるプラスチックごみを削減するための取り組みとして、マイバッグデザインコンテストを開催します。奮ってご参加ください。

テーマ 神戸女学院にある豊かな自然

募集期間 2019年12月9日(月)～

2020年1月24日(金) 16時50分(必着)

応募資格 神戸女学院大学生・院生、教職員、卒業生

問合せ先 神戸女学院大学 学長室(広報)

電話 0798-51-8585

Email koho@mail.kobe-c.ac.jp

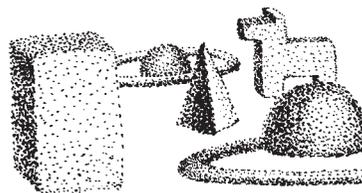
その他詳細はホームページをご覧ください。

<https://www.kobe-c.ac.jp/events/mbdc>

【QRコード】(PC画面にリンクします)



(学長室)



## 中高部報告

## 高校生模擬裁判選手権に挑戦して

高等学部 2年生

私たちは8月3日(土)に大阪地方裁判所で開催された第13回高校生模擬裁判選手権関西大会に出場しました。選手権に応募できるのは各学校1チームと決まっていたため、私たちは高2生と高1生の混合グループで参加しました。最初は学年の違う中、緊張しながらでしたが、夏休み中もたくさん準備し、関西大会第4位を受賞することができました。

模擬裁判選手権に応募すると、まず予選があります。私たちは書類で予選を突破しました。そこから、本選で扱う事件の資料が配られ、各学校に弁護士さんが3人、検事さんが1人ついてくださいます。準備がはじまったころ、私たちは何も知らなかったのですが、皆さんが本当に丁寧に教えてくださいました。また、裁判所、検察庁も見学させていただきました。ほとんどが法学の道を目指している私たちにとってとてもいい経験となりました。課題の事件は検察チームにも弁護士チームにも平等に難しい内容で、証人尋問や被告人質問で自分たちの主張を裏付ける証言を得るために、あらゆる可能性から質問の内容や仕方を深く考えることが重要でした。幾度となく皆で集まり何度も煮詰まりながらも、直前まで準備を重ねました。最初こそ年齢も違うし関わりもなかった私たちでしたが、最後には初出場にして賞を取るまでのいいチームになりました。

最後になりましたが、私たちを最後まで支えてくださった先生方、弁護士や検事の先生方、最高の仲間たち、その他ご協力くださったすべての方に感謝します。

## 書道部で過ごした日々

高等学部 3年生

全国高校大学書道展は私にとって書道部最後の書道展でした。幼稚園の頃から書道を習いはじめ、書道部には高校から入部しました。書道部では自分よりも大きなかなの作品を書くことが多く、小さな漢字の作品しか経験のない私には墨の濃淡やかすれ具合を意識することなど慣れないことだらけでした。高2の夏に参加した合宿で朝から夜まで作品を書くうちにたくさん書けば書くほど良いものになることを実感し、それからは枚数を多く書くことを意識するようになりました。高3になってからは作品として仕上げることへの意識が強くなり、その分思うように書けない自分に嫌気がさすことも多かったです。高大展は今まで1番良いものを出したいと思い、時間がある限り書いてきたので優秀賞をいただけたことは頑張ったことが結果に繋がったように感じ、とても嬉しかったです。入賞作品の展示会は素敵な作品ばかりで、この中に自分のものがある喜びとともに自分の未熟さを痛感しました。決められた締切の日まで周りとは切磋琢磨しながら、作品とそれを書く自分と向き合うことは楽しいことばかりではありませんでしたが、満足いく作品が書けた時の喜びは大きなものでした。こんなに素敵な経験をさせてもらったこと、たくさん指導して下さった先生への感謝を忘れず、書道部で過ごした時間で得られたたくさんのお話を大切にこれからも過ごしていきたいと思っています。

## 第40回関西女子中学生英語暗唱大会報告

中学部 3年生

私は9月7日(土)に大阪女学院でおこなわれた第40回関西女子中学生英語暗唱大会に出場させていただきました。この大会では、近畿の中学校から各校1人が集まり、それぞれが選んだ題材を3分以内で暗唱し、5名のネイティブの教授の方々が審査してくださいます。

私が暗唱課題に選んだものは Stephanie's Ponytail というアメリカで親しまれている絵本で、クスッと笑える、楽しいお話です。夏休み明けすぐの大会だったので夏休みに頑張らないといけなかったのですが、引退試合を控えていたため、ほぼ毎日部活があり、あまり練習ができていませんでした。学校がはじまってから、先生方にご指導いただいていたなんとか完成しましたが、私にとって大勢の聴衆の前で英語を話すのは初めてだったので、発表中に文章を飛ばしてしまわないかと、本番はとても緊張しました。実際本番ではミスなく自分の最大限の力を出し切れたのですが、他の発表者のスピーチを聞いているうちに、自分のスピーチに対する自信がなくなっていき、入賞さえできないのでは、と不安になっていました。だから、表彰式で自分が1位に選ばれた時は、信じられなかったです。少ない練習の中でも1位という結果を残すことができたのは、普段から英語が身近にある神戸女学院の英語教育のおかげだと思います。

最後になりましたが、ご指導して下さった先生方や応援してくれた家族や友人など、全ての方々に感謝しています。本当にありがとうございました。

## 中高部芸術鑑賞会 新才能「紅天女」

今年度の芸術鑑賞会は、新才能「紅天女」を鑑賞した。この演目は、40年以上にわたって連載が続いている美内すずえ作漫画『ガラスの仮面』の作中劇として登場するオリジナル作品である。

まず鑑賞する前に原作者によるプレトークが予定されていたものの、美内氏のご体調が悪く、代わって急遽、阿古夜・紅天女を演じられる人間国宝梅若実玄祥氏のお話を伺った。能面の内にある素顔の梅若氏のお話をお聞きした上で作品の鑑賞に臨むことができたのは、貴重な機会だった。

さて本編は、まず月影千草役の元宝塚歌劇団鳳翔大氏による朗読から静かに物語がはじまる。続いて、いよいよ阿古夜と仏師一真との出会いと別れが幽玄な世界観において描かれていく。能が初めてという生徒がほとんどである中、謡や演奏、そして舞の迫力に、生の舞台ならではの臨場感を存分に味わったことと思う。また狂言パートの茂山七五三氏と茂山逸平氏による東の者と西の者との「愚かな」争いのやりとりは、平和と自然との共生というテーマを明確にしながら、結末部の梅若実玄祥氏による紅天女の圧巻の舞へと続き、幕を閉じた。

この新才能は漫画を原作とするものの、そのテーマの根源には阪神淡路大震災・東日本大震災への鎮魂のメッセージを読み取ることができる。今年の夏も洪水による被災地の惨状がテレビに映し出された。まさに現代を描いた「能」であったと感じる。

(中高部視聴覚委員会)

## S 校内大会

2019年度のS校内大会は、1学期期末試験終了後の7月8日(月)におこなわれました。種目はソフトボール、バレーボール、バスケットボール、卓球、リレーの5種目で、体育祭の縦割りとは違い全学年クラス対抗戦で試合がおこなわれます。体育祭では学年を越えて、上級生と下級生が協力して組ごとにレースをおこないますが、校内大会では上級生も下級生も同学年の他クラスもライバルとなるので、先輩に食らいつく後輩の勢いを、どう先輩が返り討ちにするのか、起きてはならない下剋上が起こってしまうのか、毎年どの種目も白熱した好ゲームが繰り上げられます。

今年もS3の活躍が目立ちましたが、卓球とリレーではS1が奮闘し、S1Cは総合第2位を受賞しました。最後は勝者も敗者もお互いを称えあい、涙と感動の思い出に残る1日となりました。

またこの行事がS3体育部員の最後の仕事となり、今後はS2体育部へと仕事引き継がれます。S3体育部員の皆さん、体育祭、校内大会の審判や運営、また裏方としての準備など、本当に良く頑張りました。1年間ご苦労様でした。

〈バスケット〉

1位 S3C 2位 S3A 3位 S2B

〈バレー〉

1位 S3A 2位 S3B 3位 S3C

〈ソフトボール〉

1位 S3B 2位 S3C 3位 S3A

〈卓球〉

1位 S1B 2位 S1A 3位 S1C

〈リレー〉

1位 S1C 2位 S2C 3位 S1A

〈総合〉

1位 S3C 2位 S1C 3位 S3A

ブービー S1B

(S体育部顧問)

## 2019年度 J 校内大会

2019年度J校内大会が7月10日(水)におこなわれました。実施種目はドッジボール、ポートボール、卓球、リレーです。各種目フェアプレーの精神のもと熱戦が繰り上げられ大盛り上がるの校内大会となりました。

試合結果は以下の通りです。

ドッジボール a	ドッジボール b
優勝 J3C	優勝 J3A
2位 J2A	2位 J3B
3位 J1D	3位 J3C

ポートボール	卓球
優勝 J3C	優勝 J3B
2位 J3B	2位 J1C
3位 J3A	3位 J1A

リレー	総合成績
優勝 J3B	優勝 J3B
2位 J2A	2位 J3C
3位 J3C	3位 J2A

ブービー賞

J1A J1C

(J体育部顧問)

## 米加田先生のメッセージ

高等学部 3年生

6月15日(土)、S2、S3の生徒計11人は、教員3名に引率していただき、釜ヶ崎に行って炊き出しをしました。釜ヶ崎は大阪市西成区にある、日雇い労働者の方が住まれている場所で、あいりん地区とも呼ばれているところです。朝、いこい食堂に着くと、すでに米加田先生が準備を整えてくださっていて、私たちもお米を一つも無駄にしないように気を付けながらおにぎり作りをはじめました。正午に炊き出しをはじめると約100の方が並んで待ってくださっていました。その日はとても暑かったため、おにぎりと一緒に冷たいお茶もお出ししました。たくさん作ったおにぎりもすべて配り終わり、昼食をとって語らいの場を持ちました。その時米加田先生が何度もおっしゃっていたことは、「外来語をカタカナであらわした言葉に惑わされるな」ということです。私たちはカタカナ言葉の意味を理解せずに使うことがあり、そのためにしばしばそれらの言葉に欺かれることがあります。だから、それを見抜くには、自分の目で見て考えて判断することが重要で、今後もっとそういう力は必要になる。だからこれから生きていくうえで自分の頭で考えようと意識することが大切だ、とおっしゃっていました。カタカナに限らず、他人の意見に流されることなく、真実を自分の目で見て判断することは重要なことだと思います。米加田先生のメッセージを心に留めて、これからの日々を歩んでいこうと思います。

## 長島・広島訪問を通して

高等学部 2年生

長島・広島研修では多くの人の話を聞く機会があります。元ハンセン病患者の方、被爆者の方からは自身の経験されたお話を聞き、広島、愛知で学ぶ同年代の中高生、神戸女学院の先生、生徒とは普段学校で同輩とは少し恥ずかしくて話しづらい話題についても話し合う機会が与えられます。日常では考えることがあまりない平和というテーマをもとに自分と異なる考えを持つ人々と話すことは私に刺激と新たな発見をもたらしました。多くの学びの中で私は、「伝える」ことの難しさと大切さを実感しました。今回ご自身の経験を話してくださったお二方が「みなさんの前で話すということは同時に辛い昔のことを思い出します。それでも、皆さんの前で話をするのは、私の経験を聞いてこれからの日本を担う皆さんが同じ過ちを繰り返さないようにして欲しいからです。」と話しておられました。伝えることは辛いことでもありながら、とても有意義なことです。私たちはお二方の勇気ある行動によって、学ぶ機会を与えられました。被爆者や元ハンセン病患者の高齢化が進む中で、今度は私たちが伝えられる側から伝えていく側にならなければなりません。この研修での学びをさらに深め、伝える努力を続けていきたいです。被爆者や元ハンセン病患者の方の高齢化のため、長島・広島訪問はいつなくなるかわからない状態です。この訪問に興味がある方がいれば、早く行動に移されることをおすすめします。

## 白浜訪問報告

高等学部 2年生

7月22日(月)～23日(火)にかけて、白浜訪問に参加させていただきました。白浜訪問とは、三段壁で、自殺予防や人命救助の活動をおこなっている白浜バプテスト教会の藤藪庸一先生を訪ね、お話を聞き、その活動の一環である「コペル君」に実際に参加させていただくというプログラムです。

当日、三段壁の見学を終え、私たちは子どもたちの待つ教会へ向かいました。

学童保育「コペル君」では、20人ほどの子どもたちが、毎日教会で宿題をしたり遊んだり昼食を食べたりして、楽しい時間を過ごします。中には誰もいない家で、一人でご飯を食べていた子どももおり、そんな状況をなくそうとこの活動がはじめられました。子どもたちは皆元気で、仲が良く、楽しい時間を共に過ごすことができました。夜には、藤藪先生のお話を聞き、語らいの時をもちました。

私は藤藪先生のお話を聞いて衝撃を受けました。こんな風に信仰を支えに、自分の全てを捧げて他人のために尽くす人がいるのか、と。自分ならば到底できそうにないことを、何回も悩み、傷つき、苦しみながら、それでも懸命に他人に寄り添う藤藪先生の姿を見て、自分を恥じました。

この白浜訪問を通して学んだことは、人とのつながりの大切さです。人のつながりによって人は毎日を生き、苦しみから救ってくれるのもまた、人のつながり、誰かの存在です。私も藤藪先生のように、誰かの心に寄り添うことができる人間になりたいと切に願います。

## リーダーシップトレーニングキャンプ

7月22日(月)～24日(水)に、リーダーシップトレーニングキャンプを今年も山東自然の家でおこないました。参加生徒が50名。教員5名が引率しました。

本校の行事の多くは、できるだけ教員の手を借りず、生徒の手で運営され、毎年昨年度の反省と先輩からの引き継ぎを生かして、よりハイレベルなものをつくりあげています。

しかしこの方式は、引き継ぎ事項が年々膨大になり、前年通りするのに手一杯になってしまう負の側面もあります。「リーダーとは何か」今年の幹部の生徒たちと考える中で、未知のものに挑戦するチカラを養おうと決めました。前年度まで当たり前のようであったジグソーパズルのイベントや、食事コンテスト、レクリエーションのいくつかを勇気をもってなくし、その代わりに旗作り、教員を交えた食事会、新しいゲームなどのプログラムを考案。そして宗教プログラムの大きな変更。幹部で何度も相談し、参加する生徒にも綿密に伝えて、実施しました。

実際やってみると、準備不足、タイムスケジュール通りにいかない、指示がしっかり伝わらないなど、うまくいかないことが昨年度より多かったように思います。しかし、新しいものを企画するチカラであったり、失敗を想定するチカラ、不測の事態に臨機応変に対応するチカラなど、前年度を引き継いだだけでは学べなかったことが多かったと胸を張っていえるリーダーシップトレーニングキャンプでした。

(中高部教諭)

## アメリカ アカデミック スタディツアー

7月14日(日)～8月4日(日)までS1生徒24名と引率教員2名、旅行会社の添乗員の総勢27名でアメリカミネソタ州のSt. Croix Lutheran Schoolでおこなわれた英語語学研修に参加した。St. Croix Lutheran Schoolはミネソタ州最大の都市ミネアポリス&セントポールまで車で20分程度の自然豊かな郊外にあるキリスト教の私立学校である。

今年度の語学研修に参加した生徒は総勢130名ほどで、内訳は中国人が最も多く、次いでベトナム人、日本人の生徒が多く、韓国からは6名のグループが一つだけの参加であった。

初日におこなわれた英語の学力テストの結果で、クラス分けがされた。今年度は中級のクラスに入った生徒が多く、17名のクラス中、神戸女学院の生徒が9名というクラスもあった。午前中の授業は、まず礼拝ではじまり、英語の授業(Reading, Writing, Grammar, Presentationなど)が3時間、社会、数学、理科のうち1科目が週替わりで1時間おこなわれた。礼拝では、神戸女学院とは異なる自由な礼拝形式に戸惑いつつも、週ごとに歌うChristian Songを気に入って休み時間に口ずさむ生徒も見られた。

すべての授業はSt. Croix Lutheran Schoolの教員が担当し、生徒たちはアメリカの授業を体験することができた。英語の授業はそれぞれのレベルに合わせて内容が工夫されていた。例えば、よく話せる生徒が多いクラスでは、毎日自分の国や住んでいる町についてのプレゼンテーションをおこなったり、野球を知らない国から来ている生徒が多いクラスでは野球のルールを説明したプリントを読んだ後、実際に野球をグラウンドでおこなったりした。クッキーのレシピを読んで、実際に教室でクッキーを焼いたクラスもあった。

生徒たちは英語で受ける数学や理科、社会の授業も経験した。数学の文章題を解くのに苦労した生徒もいたが、理科の授業ではゴーグルをつけて簡単な化学の実験を楽しんでいた。

午後には様々なアクティビティが用意されていた。州会議事堂やセントポール大聖堂、科学館や美術館、遊園地など様々な場所に観光に行ったり、ボランティア活動をおこなったりした。St. Croix

Lutheran Schoolの高校生がグループリーダーとなって午前とは異なるグループで活動し、生徒たちは積極的にほかの国から来た生徒たちに話しかけて交流を深めようとしていた。ミネソタツインズの野球の試合を見に行った時は、乱打戦になりインニングが進むのが遅く「もっと長く見ていたい」という生徒たちの希望で予定時間より長く試合を観戦した。球場の雰囲気は日本とは異なり開放的で生徒たちはとても楽しんだようだった。

1週目の週末には、生徒たちが最も楽しみにしていたホームステイがおこなわれた。金曜日夕方、生徒たちは待ちに待ったホストファミリーとの対面に緊張しながらも笑顔で挨拶をし、各々のホストファミリーと週末を過ごした。日曜夕方学校に戻ってきた際には、どの生徒にも楽しい時間を過ごしたことがよくわかる幸せな表情が見られた。この語学研修旅行は今回で4回目となるが、初回の立ち上げの段階から前回までホームステイプログラムのためにご尽力くださり、春に天に召されたKCC-JEE理事の石田卓三氏のお働きに感謝するとともに、昨年度まで本学院中高部に英語科教諭として勤務されていたMs. Maylandが石田氏の仕事を引き継ぎこのプログラムを実現させてくださったことにも心より感謝する。このプログラムが今後も継続されることを願う。

最終日には、講堂で各クラスが趣向を凝らした発表をした。劇をしたクラスの生徒は、劇の練習がとても楽しかったと言っていた。自作の詩を発表したクラスもあった。同日夕方にはtalent showが開かれ、生徒たちはダンスを披露した。様々な国の生徒や教員が歌やダンスを披露したり、午後のアクティビティを取りまとめてくれた大学生のリーダーたちが寸劇をしたりと楽しい時間を過ごした。生徒たちはshow終了後も、仲良くなった友人やリーダーと写真を撮ったりメッセージを書いたりして別れを惜しんだ。

生徒たちは研修旅行を存分に楽しんで、全員無事帰国した。今回の経験を今後の生活に活かしてほしいと願う。

(中高部教諭)

## 夏山登山

7月31日(水)～8月2日(金)に白山に登りました。参加人数は、生徒45人(J2:16人、J3:11人、S1:4人、S2:14人)と引率教員8人でした。

1日目、15時45分に石川県白山市の白峰温泉ホテル八嶋に到着しました。夕食は、炉端焼きの岩魚や虹鱒、和風チーズフォンデュなど豪華メニューで、みんな美味しく食べていました。

2日目、4時30分起床、バスで移動し7時に登山口から3グループに分かれ10分間隔で出発しました。白山は初心者でも登りやすく、水も豊富なため各休憩ポイントで水を汲むことができます。天候も良かったので、しっかりと水分補給をして登り、中飯場→甚之助避難小屋→エコラインを経由し、白山室堂へ到着しました。自由時間におこなわれた自然観察教室には多くの生徒が参加していました。標高約2500mの白山室堂は、空気が澄んでおり、山々に沈む綺麗な夕日と共に皆で夕拝を守ることができました。夜は雲の合間に美しい星空を見ることができました。

3日目、4時に出発し頂上の御前峰(2702m)に登りました。頂上には、日本海からアルプス連峰まで360度見渡せる眺望に囲まれた神社があり、神主さんが白山の歴史や方角と位置関係等を説明してくださり、全員で万歳三唱を終えると太陽が顔を出し、感動と共にご来光を拝むことができました。

22時に西宮に到着し、行程を無事終えることができました。

引率して下さった先生方に感謝申し上げます。

(夏山登山ディレクター)

## エンパワーメントプログラムの報告

7月22日(月)～26日(金)まで、S1-6名、J3-49名を対象に、エンパワーメントプログラムが開催されました。ISAを通して集められた11名の学生がグループリーダーとしてプログラム中のいろいろな活動を導く中、参加した生徒たちは楽しみながら内容の濃い充実した5日間を過ごしました。今回も前回と同じファシリテーターで、ジャマイカ出身、リーダーもアメリカの大学生に加え、日本の大学に留学中の学生たちで、プログラム中に出身国の紹介もあり、国際色豊かなプログラムとなりました。

5日間のプログラム中、参加者は個人でもグループでも何回も英語でプレゼンテーションをおこないます。初日には小さな声でしか発表できなかった生徒もいましたが、最終日には全員が大きな声で、自信をもって、笑顔でプレゼンテーションをおこなうことができました。エンパワーメントプログラムに参加したことが自分の人生の転機の一つになったと発表する生徒も見られました。リーダーから多くの影響を受けたと発表した生徒もいました。

今年は参加人数も多く、例年以上に満足感を得た生徒が多く、とても楽しかったという感想が多く聞かれました。勇気を出して、リーダーに話しかけ、自分の英語が通じる喜びを感じた生徒が多くいました。単なる英語研修プログラムではなく、自分の夢や人生について真剣に考え、自分に誇りを持つことができた生徒が多くいたことも喜ばしいことでした。

(中上部教諭)

## 2019年度文化祭「綺」

9月13日(金)、14日(土)に中高部文化祭が催されました。文化祭までの準備の日々においては、台風やゲリラ豪雨が続きましたが、文化祭の2日間は見事に晴れ、特に大きなトラブルもなく無事に進めることができました。

今年の文化祭のテーマは『綺(ひかり)』でした。学年やクラスでは、個性を充分に活かした様々な展示やゲームがおこなわれました。自然の光を効果的に用いたスタンドグラス風の装飾や、ろうそく風の電飾など、それぞれに工夫を凝らした『綺』の演出も、素晴らしかったです。

また、クラブや有志団体でも日頃の練習の成果が発揮され、それぞれの熱意が伝わる素晴らしい展示や舞台がおこなわれました。文化祭を最後に最高学年が引退するクラブも多く、思いの詰まった展示や舞台は観る人を魅了し、本人たちにとっても、観る人にとっても思い出に残る感動的なものであったことと思います。

学内生も、来てくださるお客様も、関わる全ての方が楽しめるような文化祭を目指して、文化祭企画実行委員会でも様々な企画や装飾に取り組みました。神戸女学院生活を紹介する「ジョガコレ」や「探究、英語スピーチ発表」などの活動報告をおこないました。日頃の学校での学びと交わりの様子を、たくさんの方に観ていただき、大変好評であったと思います。

校外用文化祭の最後のエンディングでは美しく飾られた藤棚で様々なパフォーマンスがおこなわれ、文化祭を締めくくるとにふさわしいものとなりました。

昨年度から忍耐強く話し合いや作業を重ねて創った装飾は、文化祭をよりいっそう綺麗に輝かせるものにしてくれました。テーマに合わせた階段装飾や天井に施された華やかな装飾の前で、多くの方々が立ち止まって眺めておられました。葆光館(中高部1号館)やアンジー・クルー館の入り口装飾やグラウンドの藤棚装飾も、今年度は一工夫加えて取り組みました。そういった、一つひとつのアイデアを丁寧に折り重ねてゆくように作業する生徒たちの姿が、文化祭企画実行委員会を中心として創り上げる

文化祭の魅力であると思います。

文化祭のテーマである「綺」という字は、糸偏に、「奇」と書きます。この「奇」という字は、「他とは異なる、あやしい神への祈り」が元となっているそうです。この「あやしい」というのは、普通ではないことを示していることから、「優れている」とか「抜きん出ている」という意味にあたります。つまり、優れた神様への祈りが実現したという、その様を指しているのが、「奇」となるのですが、そこに「糸」がつくことで、織物を指すこととなります。細い糸が見事に、縦横と織りなすことで、なんとも巧みで美しいものが実現した、そこから「綺」となったそうです。

「綺」は、見た目の美しさだけではありません。この字には、「神への祈り」が書き込まれています。「どうか、良いものができ上がりますように」という祈りが、縦に横にと何重にも織りなすことによって、実現した美しさ。

そのような、見た目の美しさだけでなく、内に込められた美しさが、「ひかり」輝いた文化祭であったように思います。

校外からお越しくくださった何千人ものお客様方、そして施設課の皆様をはじめとする、この文化祭を支えてくださった全ての方々に関心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。この文化祭が、多くの人の心に、いつまでも「綺」として輝く思い出として残っていたら幸いです。

(文化祭企画実行委員会顧問)

## キャンパス見学会

11月16日(土)、少し肌寒いながらも、快い秋晴れの土曜日に2019年度のキャンパス見学会は開催されました。例年多くの来校者をお迎えし、特に開場時には模擬授業やキャンパスツアー、プラネタリウムの抽選などの混乱でお客様にご迷惑をおかけしていたため、今年度はウェブによる事前抽選をおこない、これが功を奏して入場はスムーズでした。模擬授業のライブ中継など、新しい試みには多くの改善点もありましたが、ワークショップやクラブ発表、ツアー案内などでの生き生きとした生徒たちの姿に、また英語の授業体験やKCラボでの理科の実験体験、その他さまざまな展示にも、親子ともども深い関心をもっていただいたようです。

現在の小学校3年生から5年生といえ、新しいカリキュラムの施行学年であり、小学校での英語の授業時間数も増えていく生徒たちです。そうした教育改革の只中にある世代の親子が、神戸女学院の教育に大きな関心を抱き、本校の入学を考えていただいているのは本当にありがたいことです。

今回のキャンパス見学会の入場者は1960名を超え、昨年度よりも250名以上多くの方々にご来校いただきました。これだけたくさんの方々に、本校の教育方針や生徒たちの積極的な姿、神戸女学院の美しさ、環境のすばらしさなどを知っていただく機会として、これからも大切にしたい秋のイベントと考えます。

(中高部校務課)

## 「秋の子ども会」報告

去る11月23日(土)、本校を会場にして、恒例の秋の子ども会が開催されました。当日は、高等学部有志のグループリーダーと新旧役員会のメンバーが入念な準備をして、神戸真生塾の子どもたちの到着を待ちました。

朝10時前に、今回の実行委員長によるスケジュール説明と開会宣言がなされた後、子どもたちはまず屋内でポップアップカード作りや折り紙に熱中。「自分だけの優しいお姉さん」との時間を満喫したようです。

お昼には、例年とは趣向を変えて、S役員会の新メンバーが具材豊富な数種類のサンドウィッチを作成、子どもたちとともに和氣藹々あいやいのひとときをもちました。

昼食後は、秋晴れの下、ボール遊びや大縄遊びに興じました。そして、午後2時過ぎには、役員会メンバーと子どもたちと一緒にアイスクリームとシャーベット作りに挑戦し、お腹も心も満たされた後、子どもたちは、多くのお土産を抱え、本校のスタッフに見送られて笑顔で帰っていきました。

今回の秋の子ども会も、S役員会メンバーをはじめとする多くの生徒たちの、温かく力強いボランティア精神に大いに助けられ、成功裡に終えることができました。彼女たちの生き生きとした笑顔は子ども会の糧であると実感します。皆の尽力に心より感謝申し上げます。「報告」とさせていただきます。なお、引率教員は2名でした。

(高等学部役員会顧問)

## &lt;課外活動紹介&gt;

## [クラブ] Jバスケットボール部

部長

Jバスケットボール部は、週5日、公式戦と文化祭招待試合のために練習を頑張っています。1人ひとりが、今自分は何ができるか、何をすべきかを考え、また、お互いに何でも言える関係を作っていくことにより、プレーの良い結果に繋がるように心がけています。バスケットボールをしていると、良いこともたくさんありますが良いことばかりではありません。チームで励ましあい、そのチーム力を試合などでいかしていけるよう、これからも練習に励んでいきたいと思います。

## [クラブ] J演劇研究部

部長

私たちJ演劇研究部はJ1、J2合わせて11人で毎週月、火、金曜日に活動しています。発声練習や基礎練習で基本的な声量や舞台上で動ける表現力を身につけ、年に4回ある舞台に向けても練習します。

台本が決まるとそれぞれ役の設定を細かく決め、練習を繰り返して演技力を向上させ、本番はみんなで1つの舞台を作り上げます。舞台発表において味わえる高揚感や緊張、達成感、普段は感じることのできないものです。

自分ではない人になる、という特別な体験ができる、楽しく充実したクラブです。



## [クラブ] S コンピューター部

部長

## コンピューター部での成長

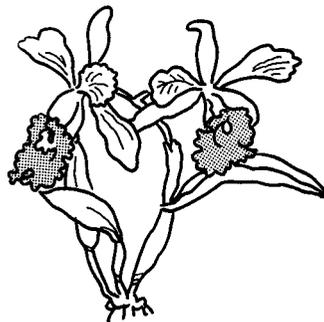
今年の文化祭、コンピューター部は3DCGを使ってVR映像を作りました。コンピューター部では毎年、自分たちで自由に展示内容を決め、それに向けて1年間取り組みます。自分たちだけで道のりを考えて本番まで準備を重ねたりするのは大変ですが、その上で、一人ではなく、部員と協力して取り組むことの素晴らしさに気づいたり、技術的にも精神的にも成長することができました。現在部員を募集しているので、ぜひ少しでも興味がある方はコンピューター部に入部してください！

## [クラブ] S 書道部

部長

## S 書道部の活動

書道部は、展覧会に向けて日々作品の練習をしています。夏合宿では、3日間同じ作品を練習しましたが、思うように筆が動かず気が滅入る時もありましたが、書道に没頭し、書く度に上達していく喜びを大いに感じました。文化祭では、書道パフォーマンスを披露しました。全員が声を出して夢中で筆を動かし、一致団結して大きな作品を書き上げました。観客から歓声をいただいた時は、皆で顔を見合わせて大きな達成感を味わうことができました。今後も互いに切磋琢磨し部活動に励んでいきたいと思っています。



## 〈学院日誌〉

9月11日(水)	中高部教員会議	10月23日(水)	理事会
9月13日(校内用)・ 14日(校外用)	中高部文化祭		臨時評議員会 臨時理事会
9月24日(火)	中学部入試説明会	11月6日(水)	中高部教員会議
9月25日(水)	理事会 中高部教員会議	11月15日(金)	教授会
9月28日(土)	重要文化財神戸女学院 特別見学会	11月16日(土)	中高部キャンパス見学会
10月7日(月)	第3回中高部長候補者選考委員会	11月20日(水)	中高部教員会議
10月7日(月)~11日(金)	高等学部修学旅行	11月27日(水)	理事会
10月9日(水)~11日(金)	中学部小旅行	11月30日(土)	2018年度ご寄付者対象 神戸女学院教育振興会クリスマスの集い
10月11日(金)	合否判定教授会	12月4日(水)	中高部教員会議
10月16日(水)	中高部教員会議	12月18日(水)	理事会
10月18日(金)	教授会	12月19日(木)	中高部教員会議
		12月20日(金)	教授会

## 目 次

今、ふたたび、神戸女学院！	1
KCC だより	3
<追悼>津田 庄八郎先生	7
重要文化財 神戸女学院 特別見学会	7
故 Margaret Larson 先生記念植樹式	8
学院リトリート	9
2019年度 宗教強調週間	10
留学報告	13
史料室の窓・ラーソン先生を覚えて	14
キャンパスお気に入りの場所	15
大学報告	
英語科教育法における学生による模擬授業	16
ホニアラ市長ら一行が本学を視察訪問	16
神戸メロンパンコンテストで増田製粉所賞を受賞	17
留学生紹介	17
受入留学生報告	18
派遣留学報告	20
認定留学報告	23
夏期語学研修報告	23
音楽学部夏期講習会報告	26
夏期インターンシップ実施報告	26
インターンシップ参加報告	27
2019年度大学教授会研修会報告	28
2019年度岡田山祭「瞬華就闘」	28
2019年度大学クローバー賞	29

2019年度めぐみ会賞	29
私の研究	30
ゼミ紹介	31
課外活動紹介	32
神戸女学院大学マイバッグデザインコンテストを開催	32
中高部報告	
高校生模擬裁判選手権に挑戦して	33
書道部で過ごした日々	33
第40回関西女子中学生英語暗唱大会報告	34
中高部芸術鑑賞会 新作能「紅天女」	34
S 校内大会	36
2019年度 J 校内大会	36
米加田先生のメッセージ	37
長島・広島訪問を通して	37
白浜訪問報告	38
リーダーシップトレーニングキャンプ	38
アメリカ アカデミック スタディツアー	39
夏山登山	40
エンパワーメントプログラムの報告	40
2019年度文化祭「綺」	41
キャンパス見学会	45
「秋の子ども会」報告	45
課外活動紹介	46
学院日誌	48

下記ページは個人情報保護等のため掲載しておりません。ご了承ください。

12, 35, 42~44